県道湯沢望月線天神バイパス関連事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

－佐久市内－

天神城跡（てんじんじょうせき）

2006.12

長野県佐久建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

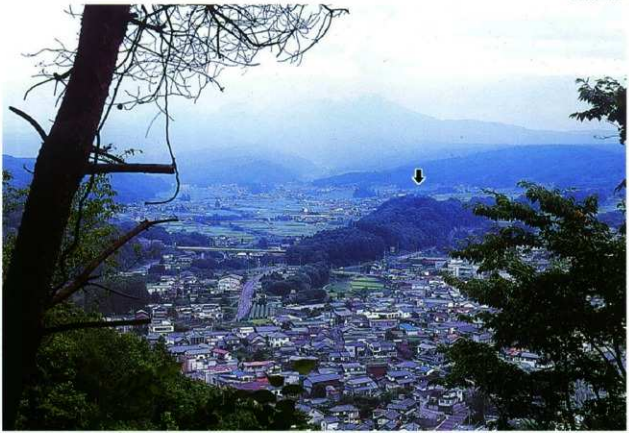
県道湯沢望月線天神バイパス関連事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

－佐久市内－

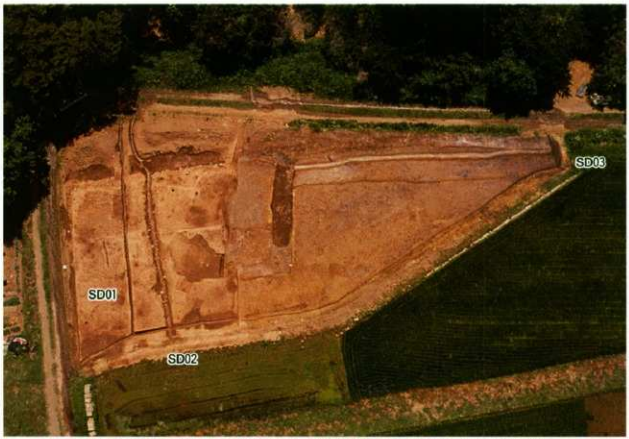
天神城跡（てんじんじょうせき）

2006.12

長野県佐久建設事務所
長野県埋蔵文化財センター



望月城跡主郭より天神城跡を望む（中央尾根が天神城跡、後方には蓼科山が霞む）



尾根上の平坦部（2区）**で確認された中世区画溝**（平成17年度・北西方向より）

南東斜面部（4区）調査風景、春日城跡方面を望む（平成15年度）

※数字は図番号、（ ）は収納番号

天神城跡出土遺物

はじめに

蓼科山の北東、その懐深い裾野部に旧望月町（佐久市）は位置しています。この地の緩やかな傾斜をもつ丘陵は、幾筋もの中小河川によって開析されて谷地を形成しています。そして、すべての河川は千曲川へ流れ下り、流下する方向の先には浅間山を望むことができます。

中世には、こうした中小河川流域の氾濫原や谷地を利用した水田開発が進み、また、丘陵上では畑地や牧の開発が進められていったと考えられます。それぞれの土地を開発し、領有する在地勢力の居館は、水田を見渡す位置や用水を押さえる場所に建てられ、裏手の丘陵上には城郭が配置されました。現在、旧望月町内で確認された城郭跡は８ヶ所にのぼり、居館跡は２ヶ所を数えます。城郭跡の中核的な存在には、現市街地（旧望月宿）を見下ろす位置に築造された望月城跡があります。天神城跡は、この望月城跡から南西へわずか１kmほどの場所に立地している城郭です。

本書は、県道湯沢望月線天神バイパスの建設工事に伴い、天神城跡を対象に行われた発掘調査の成果を示すものです。天神城跡はひじょうに保存状態がよく、主郭を含めた８つの郭と11の堀が、往時の姿を彷彿とさせます。しかし、城の南側に開けた広大な段丘上については、城郭に関連する施設が確認しずらい状態でした。今回、そのごく一部にすぎませんが、城郭南側の地区に調査のメスを入れることができ、いくつかの成果と、あらたな課題を得ることができました。

斜面部の調査では、曲輪の可能性が指摘されていた棚田状の平場が、城の防御施設ではなかったことがわかりました。少なくとも、近世以降に行われた耕地造成の段だったのです。

一方最大の成果は、段丘上で天神城とほぼ同時期の溝が見つかったことです。これらの溝は、天神城の堀と並行するか直交していることから、城と何らかの関連を持っていたと考えられます。ただし、その規模は小さく、溝で囲まれた場所から建物跡などが見つからなかったため、この土地区画がどのように利用されていたかは、新たな課題となって残りました。

中世の在地世界を読み解くには、まず、個々の土地の景観を復元することが重要です。ほ場整備事業などの開発が進んだ現在、そのためには発掘調査によって中世の痕跡を捜すことからはじめる必要があります。天神城跡周辺では、城跡のごく一部が調査されたにすぎません。城郭の南側丘陵上や、段丘下の沖積地に展開していたはずの居住地、耕作地、手工業生産地、墓地、宗教施設、荒地、山野等々……、それらが明らかにされてはじめて、この地区の景観を描くことができ、中世の在地世界を知る手がかりを掴むことができるでしょう。今回の調査が、その一歩であると位置づけられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査開始から報告書刊行に至るまで、ご理解とご協力をいただいた関係機関ならびに個々人に対し、心から敬意と感謝の意を表すしだいであります。

例　　言

1　本書は、県単道路改良事業・県道湯沢望月線天神バイパス建設に伴う、佐久市（旧望月町）大字協和字本城・塚田・水白所在の天神城跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、長野県佐久建設事務所が（財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センターに委託して実施したものである。

3　整理・報告書作成業務も、長野県埋蔵文化財センターが行った。

4　本書で使用した航空写真は、国土地理院所蔵の1947年米軍撮影のモノクロ写真の一部分である。
作成図面のベースとした地図は、国土地理院発行の「1：200,000地勢図　長野」、望月町教育委員会発行の「望月町字境図」および「天神城跡実測図」、佐久建設事務所作成の「湯川望月線　北佐久郡望月町天神　平面図」である。

5　測量にあたっては、平成14年度をタイヨーエンジニアに、平成15・17年度はユーアール測量に委託した。

6　発掘調査および整理作業の分担については第１章第１節に記した。この他、縄文土器の時期比定には贄田明調査研究員、陶磁器は市川隆之調査研究員、城郭および平成15年度調査に関しては河西克造調査研究員から、それぞれ助言を得た。

7　本書の執筆・編集は、寺内隆夫調査研究員があたり、市澤英利調査部長、廣瀬昭弘調査１課長が校閲した。

8　調査、報告書の作成にあっては、以下の方々からご教示、ご指導をいただいた。感謝の意を表したい。
小林　克氏、渋江芳浩氏、中井均氏、福島邦男氏、堀内秀樹氏

9　本書で報告した遺跡の記録および出土遺物は、佐久市教育委員会に引き渡される。

凡　　例

1　本書に掲載した実測図の縮尺は以下のとおりである。
地区全体図１：400、トレンチ断面図１：50、遺構平面図１：50、１：100、１：150、
遺構断面図１：50
土器・陶磁器１：２、小型石器２：３、大型石器１：３、１：６、銭貨１：１

2　座標はすべて世界測地系に変換してある。

本 文 目 次

巻頭図版
はじめに
例　言
凡　例

本文目次
第１章　調査経過の概要……1
　第１節　調査に至る経過……1
　　1　発掘調査委託契約までの経緯
　　2　調査・整理体制
　第２節　調査および報告書刊行までの経過……2
　　1　平成14（2002）年度測量調査
　　2　平成15（2003）年度発掘調査の経過
　　3　平成17（2005）年度発掘調査の経過
　　4　資料整理および報告書刊行までの経過
第２章　遺跡周辺の環境と調査のねらい……5
　第１節　自然環境……5
　第２節　歴史的環境……6
　　1　城郭成立以前（縄文時代～古代）
　　2　城郭期（中世～近世初頭）
　第３節　調査への課題……11
第３章　調査の方法と成果……13
　第１節　調査の方法……13
　　1　調査範囲
　　2　発掘調査の方法
　　3　資料整理・報告書作成の方法
　第２節　層　序……17
　　1　基本土層
　　2　各地区の状況
　第３節　各地区の調査概要と検出遺構……18
　　1　１区の調査（平成17年度１区）
　　2　２区の調査（平成17年度２区平坦部）
　　3　３・４区の調査（平成17年度２区斜面部・平成15年度①区・②区）
　第４節　出土遺物……30
　　1　城郭構築以前の遺物
　　2　城郭期（中世）の遺物
　　3　城郭廃絶後の遺物
第４章　成果と課題……35
　第１節　防御機能を中心とした城郭施設の有無について……35

1　主郭の南西側および南東側斜面における堀の有無について
2　段丘上における城郭関連施設の有無について
3　段状の平場は城郭に伴う曲輪であるのか
4　城郭関連施設の有無と調査地点の位置づけ
第2節　城と関連性を持った土地区画溝について……36
1　段丘上で検出された溝跡について
2　溝の類例とその性格について
第3節　新たな課題……38

写真図版
抄　録
奥　付

挿　図　目　次

図1　天神城跡の位置……1
図2　天神城跡付近の地形分類図……5
図3　遺跡分布図作成当時の地形と天神城跡の範囲……6
図4　天神城跡台地地質構造図……6
図5　周辺遺跡……8
図6　県教委の調査で想定された天神城の郭と堀……10
図7　地区設定図……13
図8　調査範囲およびトレンチ・面調査地区平面図……14
図9　1区全体図および20トレンチ柱状図……19
図10　2区・3区全体図……21
図11　2区全体図……22
図12　2区遺構個別図……23
図13　2区～4区トレンチ断面図および柱状図……25
図14　4区全体図……27
図15　4区トレンチ断面図（1）……28
図16　4区トレンチ断面図（2）……29
図17　出土遺物（1）……31
図18　出土遺物（2）……32
図19　駒ヶ根市・赤須城跡……37
図20　中世区画溝の断面形……38
図21　天神城跡周辺の小字名と城館跡……39
付図　天神城跡測量図（今回の調査範囲を含む）

挿　表　目　次

表1　周辺遺跡……9
表2　天神城跡周辺の城館跡……11

表３　仮地区の位置と調査時からの変更内容……15
表４　３区・４区トレンチ一覧……26
表５　出土石器の組成……30
表６　出土土器・陶磁器一覧……33
表７　出土石器一覧……34

写真図版目次

PL１　天神城跡の位置、遠景
PL２　遠景、１区・２区関連写真
PL３　２区遺構写真、３区遠景写真
PL４　３区・４区関連写真
PL５　遺物写真

第１章　調査経過の概要

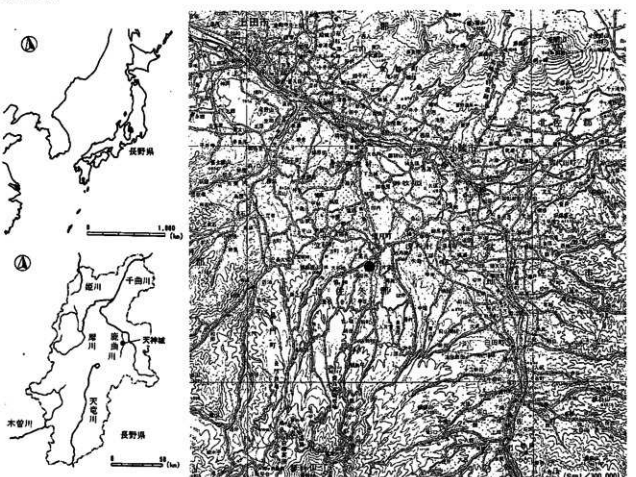
第１節　調査に至る経過

１　発掘調査委託契約までの経緯

長野県佐久建設事務所では、県道湯沢望月線に関し、天神地籍での交通事故防止と渋滞緩和のため付け替え改良事業を行う計画を立てた。この県単道路改良事業・県道湯沢望月線天神バイパスは総延長730mを計る。このうち、天神城跡に含まれる台地の南東側斜面（佐久市大字協和字水白）、トンネル坑口となる段丘上の平坦部（同・字塚田）、北西側斜面（同・字本城）が文化財保護の対象となった（図１・付図）。

工事は複数年にまたがる事業となったため、工事に伴う発掘調査も複数年次にわたった。

平成２（1990）年度、平成４（1992）年度には、望月町教育委員会によって、大字協和字水白・字北ノ沢地籍の区間について調査が実施された。この調査に関してはすでに報告書が刊行されている（望月町教育委員会1994）。



※市町村名は調査時のまま

図１　天神城跡の位置

平成12（2000）年３月、長野県佐久建設事務所、長野県教育委員会文化財・生涯学習課（以下県教委と略す）、望月町教育委員会、望月町建設課、長野県埋蔵文化財センター間で、現地において発掘調査に関する協議が持たれた。この協議で、調査対象面積が広大であることから、長野県埋蔵文化財センターが委託を受けることとなった。

平成14（2002）年12月　佐久建設事務所と委託契約が結ばれた。平成15（2003）年１月、城郭に伴う堀や曲輪の存在を地表面の起伏から確認するため、対象地区の地形測量（現況遺構の記録）を実施した。

平成15（2003）年９月　佐久建設事務所と委託契約が結ばれ、大字協和字水白地籍の段丘南側斜面、6,000㎡が調査の対象となった。

平成17（2005）年５月　佐久建設事務所と委託契約が結ばれ、春日側（大字協和字塚田、水白地籍）と、協和側（大字協和字本城）のトンネル坑口付近の3,000㎡が調査対象となった。協和側は北東への急傾斜地、春日側の坑口部は段丘上の平坦部と南側斜面である。

2　調査・整理体制

天神城跡の発掘・整理・報告書作成業務を遂行するため、以下の体制を整えた。

調査組織

＜平成15年度＞

所　長	副所長	調査部長	管理部長補佐	調査第１課長	調査研究員
深瀬弘夫	原　聖	市澤英利	上原　貞	廣瀬昭弘	河西克造・中野亮一

発掘作業参加者　市川けさ代、岩城袈裟信、小池初雄、小桜芳春、篠原一人、篠原けさい、高塚　實、藤井久雄、松本日出子

＜平成17年度＞

所　長	副所長	調査部長	管理部長補佐	調査第１課長	調査研究員
仁科松男	根岸誠司	市澤英利	上原　貞	廣瀬昭弘	寺内隆夫・中野亮一

発掘作業参加者　菊池朝光、後藤頼志、佐藤純一郎、篠原一人、篠原けさい、高塚　實、松本日出子

整理作業参加者　市川ちず子・大林久美子・佐藤志津子・半田純子・柳原澄子

＜平成18年度＞

所　長	副所長	調査部長	管理ＵＬ	調査第１ＴＬ	主任調査研究員
仁科松男	根岸誠司	市澤英利	山崎勇治	上田典男	寺内隆夫

第２節　調査および報告書刊行までの経過

長野県埋蔵文化財センターによる本格調査は、平成15年と17年の２ヶ年に渡った。また、これに先だって平成14年度に測量（現況遺構）調査を実施した。

1　平成14（2002）年度測量調査

城郭関連施設は大規模な場合が多く、現況の起伏から曲輪や堀の痕跡を確認することが可能である。このことから発掘方法などを策定するため、現況の地形測量図の作成を行った。

１月６日　地形測量の計画を立案する。地形測量はタイヨーエンジニアに委託した。
３月20日　地形測量図納品後、トレンチ設定の場所などの計画を立案する。

2　平成15（2003）年度発掘調査の経過

西側斜面（４区）に見られる段状の地形が、城郭に伴う曲輪であるのか、あるいは他の理由によるものなのか、この点を主な課題として調査を実施した。

10月15日　重機により繁茂する草木の除去、および急斜面にある調査地点までの道造成工事を開始する。
10月23日　発掘補助員を加え、本格調査を開始する。
11月19日　段７の盛土中から近世以降の伊万里焼き片などが出土する。
11月20日　急斜面での安全確保、出水対策、調査終了後の保全対策のため、調査期間の延長について佐久建設事務所と協議を行う。
11月26日　段８トレンチより内耳土器片が出土する。
12月16日　段８の写真を撮影し、トレンチ調査を終了する。
12月25日　重機による埋め戻し、土砂崩落防止用の板柵設置を完了し調査を終了する。

3　平成17（2005）年度発掘調査の経過

トンネルの両坑口において、①平成15年度調査につづく段状遺構の時期を明らかにすること。②北西側斜面において竪堀の有無を確認すること。③城郭が機能していた時期、段丘上の平坦部がどのように利用されていたか、などを明らかにするため調査を実施した。

６月13日　調査地点へ至る仮設道路の工事開始。翌日より南東側斜面の試掘トレンチの掘削を開始する。
６月15日　補助員開始式、降雨のため翌日よりトレンチ内の調査に入る。
６月20日　段丘上平坦部の掘削を開始する。
６月23日　南東側斜面部（３区）のトレンチ調査をほぼ終了する。城郭に関わる遺構・遺物は検出できなかった。
６月24日　北西側斜面部（１区）のトレンチ調査を開始する。
７月７日　北西側斜面部のトレンチ調査終了。城郭に関わる竪堀などは検出できなかった。
７月14日　平坦部では尾根筋を分断する中世の溝ＳＤ２の調査に入る。その他、縄文土器・石器が出土する。
８月２日　平坦部東側の調査終了。翌日より埋め戻しに入る。８日より平坦部西側の表土剥ぎを開始する。
８月９日　平坦部東側の溝に直行する溝ＳＤ３を検出、掘り下げに入る。
８月30日　平坦部西側の埋め戻しを終了。プレハブを撤去して調査を終了する。

重機による道の確保（奥）と表土剥ぎ（前）

調査区草刈り作業（平成15年度）

４区・段７地山面での遺構検出作業（平成15年度）

段２・第３トレンチ断面図作成作業（平成15年度）

１区安全柵と埋め戻し作業（平成17年度）

溝ＳＤ２掘り下げ作業（平成17年度）

平成17年度調査終了状況と発掘作業参加者

図面整理作業

4　資料整理および報告書刊行までの経過

平成17年（平成17年度）

10月７日　報告書掲載遺物を選択し、実測・トレースを開始する。

平成18年（平成17年度）

１月５日　図面編集作業、原稿執筆作業開始
１月11日　出土遺物の写真撮影開始
２月１日　原稿執筆開始
３月30日　原稿起案・決済を受ける

平成18年（平成18年度）

印刷費のみ平成18年度であり、入稿・校正・刊行などの業務平成18年４月以降に行った。

８月17日　印刷業務の入札
８月18日　印刷所へ入稿
12月15日　報告書刊行

第２章　遺跡周辺の環境と調査のねらい

第１節　自然環境

地理的な位置　天神城跡は、長野県佐久市大字協和字本城に主郭を置く。今回の調査区は主郭南側にあたり、字名では本城・塚田・水白である。このうち塚田地籍にあたる段丘上平坦部の位置は、基準杭ⅣＡ３で北緯36°15′14″.70、東経138°21′27″.86。世界測地系ではＸ＝28200、Ｙ＝－12784である。

長野県の中央部やや東よりから端を発する千曲川は、県東部から北部へ流下する。千曲川には多くの小河川がそそぎ込んでおり、上流城左岸の旧北御牧村・鴨河原付近にそそぎ込むのが鹿曲川である。天神城跡は、この河川を蓼科山方面に南へ12kmほど遡上した地点にある（図１）。

河岸段丘上の立地　遺跡周辺の地形・地質環境に関しては飯塚広行氏の論考（飯塚1984）から主な部分を抜粋し、若干の所見を加えてゆく。

天神城跡付近の地形を形作っている要因は大きく２つに分けられる。一つは蓼科山の火山活動による基盤地形の形成である。もう一つは、地殻の断層運動によって形成された台地状の地形である（図２）。天神城跡は、蓼科山から延びる尾根（山麓緩斜面）が段丘礫層下に埋没して、段丘地形が表面を覆う地点を利用している。尾根からの傾斜が緩傾斜に移る地点である。この上位段丘上の緩傾斜面は、中世において城郭後方の生産域や居住域などとして活用されていた可能性が想定される。一方、城郭より標高の上回る部分に広大な緩傾斜地が存在することで、軍事的には防御機能を損なう面があったと考えられている。

この段丘は、鹿曲川と八丁地川によって開析されている。両河川が合流する段丘北東部がくさびの先端のように狭まっており、この先端付近に城郭の諸施設が集中的に認められる。ここは、両河川の氾濫原との比高差約40mを計り、断崖を形成している。この天然の要害を利用して城郭が築かれたと考えられる。

また、中世において氾濫源の一部は、水田開発の対象とされたと考えられる。

東へ緩傾斜する地形　ほぼ整備前の地形を見ると、蓼科山からつながる尾根筋は遺跡の西側にある（図３）。そして、この尾根上の南西部、現・協和小学校付近から北東方向に向かって用水が通されている。この堰が鹿曲川の段丘下へ流下する地点周辺が、今回調査対象区（３・４区）である。この斜面部は、北西（八丁地川）側や城郭遺構が明瞭な段丘突端部に比べやや緩傾斜になっている。この点は、段状の平場造成の目的を知る上で示唆的である。すなわち、現況を見る限り、棚田として活用しやすいのはこの斜面である。

地質環境　天神城の乗る段丘の基盤は、古八ヶ岳期の火山噴出物である集塊岩層（春日火山岩類）で成り立っている。その上部は「泥流堆積物」・「上位段丘礫層」・「ローム層」の順に堆積している（図４）。最上層の「ローム層」は、起源が明らかにされていないが、乗鞍火山の噴出物とされる「波田ローム層」に相当すると推定されている。

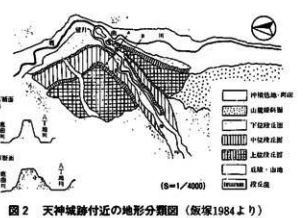


図２　天神城跡付近の地形分類図（飯塚1984より）

図3　遺跡分布図作成当時の地形と天神城跡の範囲
（望月町教委1981に加筆）

段丘上の調査区では、20～50cmほどの層厚で礫層に到達した。

第2節　歴史的環境

1　城郭成立以前

（縄文時代～古代）

『望月町誌』（望月町1984）の遺跡分布図によると、天神城跡の範囲とされる広大な段丘上では、古墳や古代の遺跡が若干見つかっている。また、望月町教委らによる3次にわたる調査で、ごく少量ではあるが、中世を遡る遺物が採取されている。以下、採取された遺物、および同時期と思われる周辺遺跡について触れておく（図5・表1）。

縄文時代　今回の調査区の北側にあたる第1次調査地点で、前期の繊維土器片と石器が出土している（國學院大學歴史考古学會1984）。また、今回の調査区の南側にあたる第2次調査地点で、中期の土器片と打製石斧が出土している（望月町教委1994）。

近隣では、鹿曲川を遡った春日地籍に前期初頭の竹之城原遺跡（168）がある。また、同じく鹿曲川流域の栃久保A遺跡（154）や、八丁地川流域の下吹上遺跡で前期前葉の集落や竪穴住居跡が確認されている。中期に入ると、鹿曲川・八丁地川流域で遺跡数が増加する。周辺地域では、八丁地川流域の平石遺跡（78）、上吹上遺跡（82脇）、下吹上遺跡（82）、鹿曲川流域の竹之城原遺跡（168）、後沖遺跡（149）、胡桃沢遺跡（24）などで、発掘調査によって集落跡が確認されている。これらは、すべて各河川に面した低位な丘陵上か、河岸段丘上に立地している。そのため、氾濫原との比高差が40mに達するような段丘上では、中期以降の大規模遺跡は存在しないと予測された。

古　代　第2次調査で平安時代の土師器と須恵器小片が出土している。奈良・平安時代は、縄文時代とともに旧望月町内で遺跡数が増加する時期である。同一段丘上には、南東部に械口遺跡（129）、下天神反遺跡（131）、協和金山遺跡（126）など、平安時代に比定された遺跡がある。近隣では、八丁地川流域の山の神遺跡（79）、上吹上遺跡（82脇）、鹿曲川流域では、竹之城原遺跡（168）、春日尾崎遺跡（152）、金塚遺跡（145）、胡桃沢遺跡（24）などで発掘調査が実施されている。下流域では、右岸上の御牧原台地上が望月牧推定地になっており、野馬除け遺構などが残存している。図5では●で示したが、●周辺の広大な地域が望月牧推定範囲である。

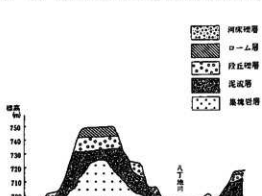


図4　天神城跡　台地地質構造図（飯塚1984より）

鹿曲川左岸の天神反遺跡（42）からは古瓦が出土しており、寺院跡が想定されている。近隣の岩清水遺跡（17）からは礎が出土しており、９世紀代には天神反遺跡周辺の寺院が廃されて、礎などが持ち出された可能性が指摘されている。また、大飼遺跡（36）では、倉庫と見られる掘立柱建物跡が見つかっている。

２　城郭期（中世～近世初頭）

天神城跡に関する研究の現状（考古資料以外）　桜井松夫氏の研究（桜井1994）によると、築造当時の名称を記した文献や絵図などは存在しておらず、城名や城主について確定的なことは言えないようである。城名は、明治11年提出資料に基づく『長野縣町村誌』（長野縣1936）では「天神林城」となっており、武藤守善氏所蔵の古図では「高呂城」となっている。前者は地籍が天神林であったこと。後者は城の東に高呂の地籍があり、立科町芦田古町・竜田山光徳寺の碑文に『好庵道雲庵主　高呂城主俗名依田小隼人』とあることを根拠としている。よって、「天神城」という名称は、あくまでも現代の遺跡名である。

城主は依田小隼人説が有力である。この人物は、芦田右右衛門佐信蕃の一族となって伴野から依田に改名している。協和・春日周辺地域は依田一族の勢力範囲であったとされている。

また、天正14（1576）『信州佐久郡之内貫之御帳』に記された「一、三百貫　天神林」の村高は、短期間で開発できる高ではないとして、天神林村の成立が「天神林用水堰」による天神城南側台地上の水田開発によるものと推定している。

また、桜井氏は天神城の存続時期を大きく２期に分けている。

第一期　文明11（1475）年、大井氏との戦に勝利した伴野氏が、大井氏領にはばかることなく八丁地川から用水を天神林の台地上に引いて開発を進め、台地先端部に天神城を構築したと推定される時期。

第二期　早くとも天文18（1549）年、『高白斉記』に武田信玄来攻時の記載がある。依田氏は武田側に付き、芦田信次が春日の城を再興したとある。桜井氏は、この「春日の城」が修築の痕跡を多くとどめた天神城である可能性を示唆している。この「春日の城」が別であったとしても、戦国の動乱の中で、少なくとも、依田氏が上野国に移封される天正18（1590）年までの間に改修が行われたと推定している。

以上、桜井松夫氏の研究から調査課題を引き出すとすると、１つめは天神城を２時期に分ける根拠が見つかるかどうか。２つめは築造年代を推定できる資料が見つかるかどうか。３つめは城南側段丘上の水田開発の時期がわかるかどうか、であろう。特に、３番目の問題はまさに調査対象地区に当たっている。

天神城跡の考古学的調査　1980年に望月町教育委員会による遺跡分布調査が実施され（望月町教委1981）、天神城跡の遺跡範囲がはじめて示された。北は段丘の突端部から、南は協和小学校付近にまで達する。1,500㎡におよぶ広大な範囲である（図３）。

長野県教育委員会がおこなった中世城館跡の分布調査（長野県教育委員会1983）では、望月町教委による分布調査時の所見を追認する形で、堀・曲輪の推定がなされている（図６）。今回調査区の２区付近に郭（曲輪）が、３・４区の上部にも曲輪と見られる段が示されている。

これらの調査は、現況の地表面観察から推定されたものである。天神城跡の範囲については、城域が広大すぎるのでないかとの疑問も出されている（桜井1994など）。特に問題となる七の郭以南で、すでにほ場整備事業によって地形が改変されているため、城域を知るには発掘調査が必要となろう。

発掘調査　天神城跡に関する本格的な発掘調査が行われたのは、道路建設にともなう緊急調査がはじまる1983年以降で、今回の調査を除き１～３次の調査が実施されている。

第１次調査は1983（昭和53）年に行われた県道雨境・望月線道路工事に伴う緊急調査で、國學院大學歴史考古学會（同学會1984）が実施した。調査区域は城郭の北西（八丁地川）側で、主郭部分を巡る６つの曲輪と５本の竪堀が対象となった。あわせて、天神城全体の現況調査を行い７つの郭を確認している。堀

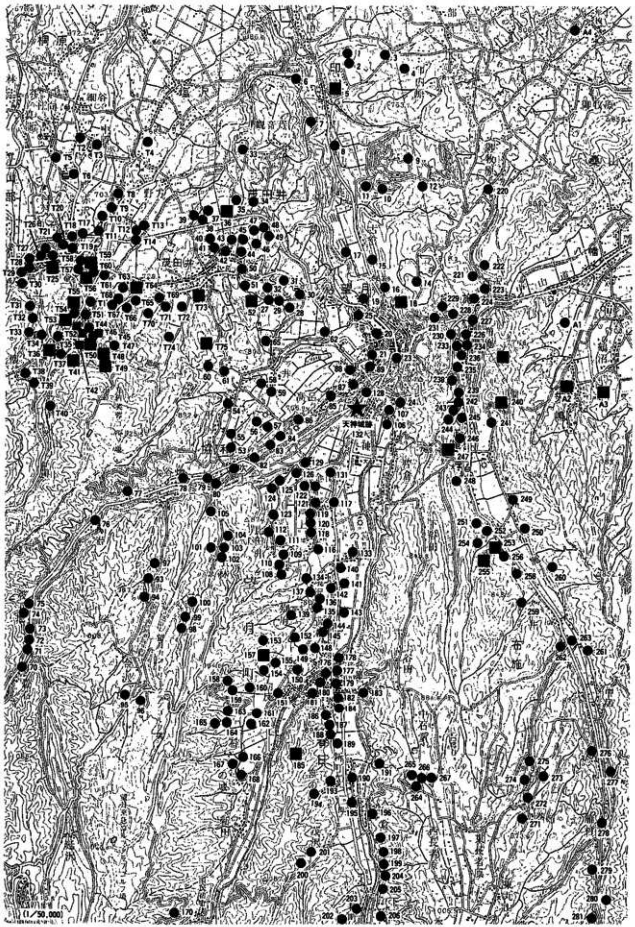


図5　周辺遺跡

■中世
●縄文および平安

表１　周辺遺跡

旧町村名（佐久市）	遺跡番号（遺月町節）	遺跡名	時代 縄文（前・中期）	平安	中世
旧望月町内（佐久市）	1	駒木沢開墾地		○	
	2	本遺跡		○	
	3	上の山		○	
	4	下ノ原北坪		○	
	5	月輪寺跡			○
	6	猫城	○	○	
	7	原の口		○	
	8	上ヶ原		○	
	9	内宿A		○	
	10	内宿B		○	
	11	内宿C		○	
	12	内宿遺跡		○	
	14	米原	○		
	15	大井		○	
	16	御立木		○	
	17	寺洞B	○		
	18	望月城跡			○
	19	寺ヶ屋敷		○	
	20	仁ノ塔	○	○	
	21	金井原	○		
	22	鹿塩原	○		
	24	明神沢	○	○	
	25	芳見	○		
	27	古沢A		○	
	28	古沢B		○	
	29	古沢C		○	
	30	古沢D		○	
	31	古沢E		○	
	32	古沢F		○	
	33	一ノ瀬		○	
	34	宮沢村		○	
	35	東青木原		○	
	36	小泉			○
	37	南青木原		○	
	38	堀込東A		○	
	39	堀込東B		○	
	40	角岡		○	
	41	宿谷	○		
	42	大門原		○	
	43	原沢原		○	
	44	上鹿A		○	
	45	北鹿B	○		
	46	寺畑外		○	
	47	東又平A		○	
	48	東又平B		○	
	49	東又平C		○	
	50	宿田		○	
	51	又久保		○	
	52	鹿塩			○
	53	荒船原	○		
	54	中野		○	
	55	宮ノ		○	
	56	北ノ	○		
	57	竹の花		○	
	58	下柳A		○	
	59	下柳B		○	
	60	柳原		○	
	61	寺田		○	
	62	松口		○	
	65	天満山		○	
	70	寺屋A	○		
	71	竹屋B		○	
	72	八丁地A		○	
	73	八丁地B	○		
	74	八丁地C		○	
	75	八丁地D		○	
	76	西畑	○		
	77	宝原		○	
	78	中ノ沢		○	
	79	山の神A		○	
	80	山の神B		○	
	81	下ノ	○		
	82	一ノ沢	○		
	83	上ノ下ノ	○		
	84	五左衛		○	
	85	高畑		○	
	86	鼻畑		○	
	87	町屋敷		○	
	88	大屋原		○	
	89	大塚	○		
	93	上位大沢		○	
	94	大木B		○	
	95	大木C		○	
	96	大木D	○		
	97	下ノ	○		
	98	三ツ林A	○		
	99	三ツ林B	○		
	100	中三林	○		
	101	鳴の原		○	
	102	宿万田A		○	
	103	宿万田B		○	
	104	宿万田C		○	
	105	宿ノ		○	
	106	宿ノ城口		○	
	107	大畑	○		
	108	日向林A	○		
	109	日向林B	○		
	110	日向林C	○		
	111	城山		○	
	112	下城	○		
	116	イ外田	○		
	117	東の田		○	
	118	五反田		○	
	119	鹿塩A		○	

旧町村名（佐久市）	遺跡番号（遺月町節）	遺跡名	時代 縄文（前・中期）	平安	中世
旧望月町内（佐久市）	120	鹿塩B		○	
	121	十二ヶ谷A	○	○	
	122	十二ヶ谷B		○	
	123	鹿塩上畑		○	
	124	宝上B原A		○	
	125	宝上B原B		○	
	126	鹿塩金山		○	
	127	宝ノ沢原		○	
	128	本田		○	
	129	城口		○	
	130	下天神		○	
	131	天神城跡	○	○	○
	132	宮野原	○		
	133	宮ノ		○	
	134	宮神平A		○	
	135	宮神平B	○		
	136	宮神平C		○	
	137	別所		○	
	138	下ノ原	○	○	
	140	中道	○	○	
	142	長野	○	○	
	143	矢部岡	○	○	
	144	長谷	○	○	
	145	金井原	○	○	
	146	明神沢	○	○	
	147	保沢	○	○	
	148	柳原	○	○	
	149	柳原	○	○	
	150	向原	○	○	
	151	寺日遺跡	○	○	
	152	城久保	○	○	
	153	前久保A	○	○	
	154	前久保B		○	
	155	前久保遺跡		○	○
	156	新地		○	
	157	清水A	○	○	
	158	清水B		○	
	159	中条原		○	
	160	大門原		○	
	161	宮ノ	○	○	
	162	宮日寺ヶ入	○	○	
	163	宮日山寺ヶ入	○	○	
	164	八丁地久保	○	○	
	165	八丁地久保		○	
	166	宮ノ入遺跡		○	
	167	宮沢沖		○	
	168	宮沢沖		○	
	169	宮ノ		○	
	170	下ノ沢		○	
	171	宮日寺		○	
	172	宮日寺原遺跡		○	○
	173	久保	○	○	
	174	金井原		○	
	175	金井原		○	
	176	中ノ		○	
	177	上ノ山		○	
	178	前沢		○	
	179	前沢		○	
	180	前沢		○	
	181	上ノ山		○	
	182	矢原		○	
	183	新原		○	
	184	天ノ入A		○	
	185	天ノ入B		○	
	186	天ノ入C		○	
	187	前原A		○	
	188	前原B		○	
	189	前原A		○	
	190	前原C		○	
	191	牧原A		○	
	192	牧原B		○	
	193	宮沢		○	
	194	宮ノ		○	
	195	宮沢		○	
	196	宮沢		○	
	197	宮沢		○	
	198	宮沢		○	
	199	宮沢		○	
	200	宮沢		○	
	201	宮沢		○	
	202	宮沢		○	
	203	宮沢		○	
	204	宮沢		○	
	205	宮沢		○	
	206	宮沢		○	
	207	宮沢		○	
	208	宮沢		○	
	209	宮沢		○	
	210	宮沢		○	
	211	宮沢		○	
	212	宮沢		○	
	213	宮沢		○	
	214	宮沢		○	
	215	宮沢		○	
	216	宮沢		○	
	217	宮沢		○	
	218	宮沢		○	
	219	宮沢		○	
	220	宮沢		○	
	221	宮沢		○	
	222	宮沢		○	
	223	宮沢		○	
	224	宮沢		○	
	225	宮沢		○	
	226	宮沢		○	
	227	宮沢		○	
	228	宮沢		○	
	229	宮沢		○	
	230	宮沢		○	
	231	宮沢		○	
	232	宮沢		○	
	233	宮沢		○	
	234	宮沢		○	
	235	宮沢		○	
	236	宮沢		○	
	237	宮沢		○	
	238	宮沢		○	
	239	宮沢		○	
	240	宮沢		○	
	241	宮沢		○	
	242	宮沢		○	
	243	宮沢		○	
	244	宮沢		○	
	245	宮沢		○	
	246	宮沢		○	
	247	宮沢		○	
	248	宮沢		○	
	249	宮沢		○	
	250	宮沢		○	
	251	宮沢		○	
	252	宮沢		○	
	253	宮沢		○	
	254	宮沢		○	
	255	宮沢		○	
	256	宮沢		○	
	257	宮沢		○	
	258	宮沢		○	
	259	宮沢		○	
	260	宮沢		○	
	261	宮沢		○	
	262	上宮沢		○	
	263	宮沢		○	
	264	宮沢		○	
	265	宮沢		○	
	266	宮沢		○	
	267	宮沢		○	
	268	宮沢		○	
	269	宮沢		○	
	270	宮沢		○	
	271	宮沢		○	
	272	宮沢		○	
	273	宮沢		○	
	274	宮沢		○	
	275	宮沢		○	
	276	宮沢		○	
	277	宮沢		○	
	278	宮沢		○	
	279	宮沢		○	
	280	宮沢		○	

旧町村名	遺跡番号（甲・乙・丙 報告番号）	遺跡名	時代 縄文	平安	中世
北相木村	1	天狗	○	○	
	2	金井		○	
	3	中原上		○	
	4	中原A		○	
	5	中原B		○	
	6	中原九川	○	○	
	7	地蔵		○	
	8	中原南		○	
	9	中原南		○	
	10	中原北遺跡		○	
	11	仁ヶ上		○	
	12	仁ヶ上		○	
	13	長り出		○	
	14	東谷岡		○	
	15	山ノ神		○	
	16	本大地蔵		○	
	17	大地蔵		○	
	18	四郎		○	
	19	宮町北遺跡B	○	○	
	20	宮町北遺跡A	○	○	
	21	宮町		○	
	22	宮町北遺跡		○	
	23	上町遺跡		○	
	24	神明遺跡		○	
	25	上ヶ原	○		
	26	神明		○	
	27	長谷川		○	
	28	山ノ神		○	
	29	高山ノ神	○		
	30	中ノ		○	
	31	中ノ		○	
	32	中ノ		○	
	33	長谷遺跡		○	
	34	長谷遺跡		○	
	35	長谷遺跡	○		
	36	長谷		○	
	37	宮町		○	
	38	宮町北遺跡		○	
	39	上宮遺跡		○	
	40	宮遺跡		○	
	41	中ノ		○	
	42	宮中		○	
	43	宮ノ		○	
	44	宮ノ遺跡		○	
	45	宮ノ遺跡		○	
	46	宮ノ遺跡		○	
	47	宮ノ遺跡		○	
	48	宮ノ遺跡		○	
	49	宮ノ遺跡		○	
	50	宮ノ遺跡		○	
	51	宮ノ遺跡		○	
	52	宮ノ遺跡		○	
	53	宮ノ遺跡		○	
	54	宮ノ遺跡		○	
	55	宮ノ遺跡		○	
	56	宮ノ遺跡		○	
	57	宮ノ遺跡		○	
	58	宮ノ遺跡		○	
	59	宮ノ遺跡		○	
	60	宮ノ遺跡		○	
	61	宮ノ遺跡		○	
	62	宮ノ遺跡		○	
	63	宮ノ遺跡		○	
	64	宮ノ遺跡		○	
	65	宮ノ遺跡		○	
	66	宮ノ遺跡		○	
	67	宮ノ遺跡		○	
	68	宮ノ遺跡		○	
	69	宮ノ遺跡		○	
	70	宮ノ遺跡		○	
	71	宮ノ遺跡		○	
	72	宮ノ遺跡		○	
	73	宮ノ遺跡		○	
	74	宮ノ遺跡		○	
	75	宮ノ遺跡		○	
	76	宮ノ遺跡		○	
	77	宮ノ遺跡		○	
	78	宮ノ遺跡		○	
	79	宮ノ遺跡		○	
	80	宮ノ遺跡		○	
	81	宮ノ遺跡		○	
	82	宮ノ遺跡		○	
	83	宮ノ遺跡		○	
	84	宮ノ遺跡		○	
	85	宮ノ遺跡		○	
	86	宮ノ遺跡		○	
	87	宮ノ遺跡		○	
	88	宮ノ遺跡		○	
	89	宮ノ遺跡		○	
	90	宮ノ遺跡		○	
	91	宮ノ遺跡		○	
	92	宮ノ遺跡		○	
	93	宮ノ遺跡		○	
	94	宮ノ遺跡		○	
	95	宮ノ遺跡		○	
	96	宮ノ遺跡		○	
	97	宮ノ遺跡		○	
	98	宮ノ遺跡		○	
	99	宮ノ遺跡		○	
	100	宮ノ遺跡		○	
	101	宮ノ遺跡		○	
	102	宮ノ遺跡		○	
	103	宮ノ遺跡		○	
	104	宮ノ遺跡		○	
	105	宮ノ遺跡		○	
	106	宮ノ遺跡		○	
	107	宮ノ遺跡		○	
	108	宮ノ遺跡		○	
	109	宮ノ遺跡		○	
	110	宮ノ遺跡		○	
	111	宮ノ遺跡		○	
	112	宮ノ遺跡		○	
	113	宮ノ遺跡		○	
	114	宮ノ遺跡		○	
	115	宮ノ遺跡		○	
	116	宮ノ遺跡		○	
	117	宮ノ遺跡		○	
	118	宮ノ遺跡		○	
	119	宮ノ遺跡		○	
	120	宮ノ遺跡		○	
	121	宮ノ遺跡		○	
	122	宮ノ遺跡		○	
	123	宮ノ遺跡		○	
	124	宮ノ遺跡		○	
	125	宮ノ遺跡		○	
	126	宮ノ遺跡		○	
	127	宮ノ遺跡		○	
	128	宮ノ遺跡		○	
	129	宮ノ遺跡		○	
	130	宮ノ遺跡		○	
	131	宮ノ遺跡		○	
	132	宮ノ遺跡		○	
	133	宮ノ遺跡		○	
	134	宮ノ遺跡		○	
	135	宮ノ遺跡		○	
	136	宮ノ遺跡		○	
	137	宮ノ遺跡		○	
	138	宮ノ遺跡		○	
	139	宮ノ遺跡		○	
	140	宮ノ遺跡		○	
	141	宮ノ遺跡		○	
	142	宮ノ遺跡		○	
	143	宮ノ遺跡		○	
	144	宮ノ遺跡		○	
	145	宮ノ遺跡		○	
	146	宮ノ遺跡		○	
	147	宮ノ遺跡		○	
	148	宮ノ遺跡		○	
	149	宮ノ遺跡		○	
	150	宮ノ遺跡		○	
	151	宮ノ遺跡		○	
	152	宮ノ遺跡		○	
	153	宮ノ遺跡		○	
	154	宮ノ遺跡		○	
	155	宮ノ遺跡		○	
	156	宮ノ遺跡		○	
	157	宮ノ遺跡		○	
	158	宮ノ遺跡		○	
	159	宮ノ遺跡		○	
	160	宮ノ遺跡		○	
	161	宮ノ遺跡		○	
	162	宮ノ遺跡		○	
	163	宮ノ遺跡		○	
	164	宮ノ遺跡		○	
	165	宮ノ遺跡		○	
	166	宮ノ遺跡		○	
	167	宮ノ遺跡		○	
	168	宮ノ遺跡		○	
	169	宮ノ遺跡		○	
	170	宮ノ遺跡		○	
	171	宮ノ遺跡		○	
	172	宮ノ遺跡		○	
	173	宮ノ遺跡		○	
	174	宮ノ遺跡		○	
	175	宮ノ遺跡		○	

旧町村名（佐久市）	遺跡番号（各報告書）	遺跡名	時代 縄文	平安	中世
臼田町村	A1	天城		○	
	A2	金城城跡			○
	A3	金城城跡			○
	A4	新田寺（推定）			○

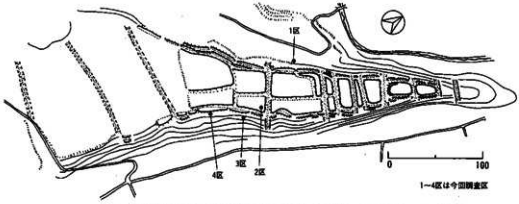


図６　県教委の調査で想定された天神城の郭と堀　（県教委1983に加筆）

の断面形は薬研堀で、３番堀は幅10mを計り、５番堀では深さが４mに達する。１番堀では、中間層に埋め戻し土が認められ、曲輪の一部として機能した期間があったことを示唆している。

曲輪からは、全面に埋石が認められている。出土遺物は内耳土器やかわらけ、青磁、信楽焼、石臼片、あるいは銭貨などが報告されている。

まとめでは、「城跡の形式は空堀と土塁によって舌状台地を仕切る梯郭式で、機能的には単純な形態……大手は南東方面（協和小学校方向）になると考えるが、……確認は不可能になっている」。この他、搦手や防御施設に触れている。また、築城の年代については「形態的に考察すると室町時代、それも早い時期」とし、「……比較的長い時間をかけて修築しているとも考えられる」としている（上代純一1984）。

第２次・３次調査は、今回と同様の天神バイパス建設工事に先立つもので、望月町教育委員会が主体となって1990（平成２）年と1992（平成４）年に実施された。

第２次調査は、今回の調査地よりもさらに南側の斜面地にあたっており、曲輪とした段状の平場を検出しているが、時期などについては触れられていない。中世に関する出土遺物には、青磁と陶器破片があり、中世の可能性を持つものとして小型の硯が上げられている。いずれも微量である。

第３次調査は、第２次調査区の北側が対象となっている。斜面部には同じく段状の平場が存在しており、このうち、上部２段については、主郭付近の曲輪と構造が類似していることから曲輪と推定している。しかし、調査は試掘トレンチと耕土層を取り除いた部分の面調査がなされたのみであり、段の構築状況や構築時期については課題として持ち越された。これ以外の段については、水田造成の可能性が高いとしているが、結論は出されていない。

また、３次調査後に刊行された報告書では、８番目の郭と11番目の堀を追加し、北端より番号をふり直している（付図参照）。

今回の調査では、これらの調査成果を踏まえて課題を設定した（次項）。

周囲に存在する城郭　天神城跡の報告書（國學院大學歴史考古学會1984、望月町教委1994）あるいは『望月町誌』（桜井1994）などにまとめられている。表２は『望月城跡』（望月町教育委員会1985）に掲載されたものである。この表では、天神城の築・在城者が望月氏になっている。

この表と遺跡分布図（図５）を参考に見ると、天神城周辺から直線距離で北東約1.5kmに望月氏の居城とされる望月城（18）がある。また、鹿曲川を下った東御市（旧北御牧村）本下之城には望月氏関係の居館と見られる下之城跡がある。天神城から鹿曲川上流側には、約3.4kmに栃久保城跡（157）がある。さらに、約4.5kmには春日城跡（185）があり、城に隣接して居館跡の推定地がある。また、比田井には城地名が残存している。北西側には、約2.3kmに倉見城跡（立科町）（T75）があり、西北西約3.6kmに芦田城

表２　天神城跡周辺の城館跡（望月町教育委員会1985より）

地区番号	名称	所在地	立地	規模(m)	保存状態	年代時期	関係者	概要
	望月町							
1	望月城跡	大字望月字城・城殿・中町・他	山頂山麓	1,500×500	やや良	室町～戦国	望月氏	南北1500mにも及ぶ最大な遺構で、高規模な城。北端に本城が位置する。郭毎郭間で結合される。
2	天神城跡	大字塩船字本城・昭和・柳田・前柳・上宿神尻・下城ヒ・上城ヒ・金上	舌地	1,500×500	やや良	鎌倉～戦国(1)	望月氏	規模は・規模は台地に匹敵する。主郭には、高さ5mにも及ぶ土塁が残り、郭毎、空堀り等大規模である。
3	虚空蔵城跡	大字布施字虚空蔵	山頂山麓	35×27	やや良	～戦国	布施氏ないし矢島氏(1)	浅科村にかかる山頂部に位置している。城郭自体は低うが良好の状態はこれからである。郭毎が良好に残る。
4	鹿久保城跡	大字布施字鹿久保・鹿窪畑	山頂山麓	650×250	やや良	～戦国	布施氏ないし矢島氏(1)	浅科村にかかる山頂部に位置しており、主郭は破壊されているが、曲輪や空堀りが明瞭に残っている。
5	布施城跡	大字布施字宮城	段丘	330×160	不良	室町～戦国	望月氏ないし布施氏	曲輪跡・有馬小学校と全く主郭の位置を共有される。曲輪や空堀りは概算と残りが明瞭である。
6	式部城跡	大字布施字城・城平・狩ノ内・城下内宿・大成・馬場代・他	山頂山麓	650×450	良	室町～戦国		式部の南東の台地に位置し、主郭、郭毎、曲輪、空堀り等顕めて保存が良い。主郭には土塁が残る。
7	天部城跡若槻神	大字布施字大成	平地	100×80	良	鎌倉～		前に式部城主の居館跡と考えられ、城郭と一帯を成している。土塁、空堀り、井戸、井戸枠、区画が明瞭に残る。
8	新久保城跡	大字春日字新久保	山頂丘陵	430×230	やや良	鎌倉～戦国	春日氏(?)	春日城跡の支城的役割を果たしたと考えられ、小規模ながら結構である。
9	春日城跡	大字春日字中条久保・法使中・鳴滝城久保・殿込・小組・鳴滝小路・他	山頂山麓	600×100	良	鎌倉～戦国	春日氏	春日城は背後に春日の正頂に位置する。主郭、曲輪、空堀り等良好に残る。原国呼は春日氏の居館跡と思う。
10	小倉城跡	大字春日字小倉	山頂山麓	1,350×600	やや良	～戦国	春日氏	春日城跡の北方、郭の南西の上に位置する切山に発掘され郭等が認められる。
	浅科村							
11	矢島城跡	大字矢島字城平・下屋敷・中屋敷	丘陵台地	400×300	やや不良	～戦国	矢島氏	矢島の南に当る各郭の南端に位置し、瓦状南側斜面を一部に見出せる。空堀等は等閑ゆえにわかれる。
12	天狗城跡	大字矢島字天狗	山頂山麓	250×200	不良	～戦国	矢島氏	矢島城跡西側の山頂に位置し、高城ゆえ、大規模な空堀りを残すと考えられる。絶景の地である。
	立科町							
13	倉見城跡	大字芦田字平倉見東・倉倉見・城影	台地	700×200	不良	戦国	倉見氏	現王寺から芦科町に下る松林原の台地に位置し、城の下・城跡である。主郭、曲輪、空堀りが残かに残る。
14	芦田城跡	大字芦田字西平・本ノ宮・林ノ上	山頂山麓	400×180	良	～戦国	芦田氏	芦田南信濃の最近な山頂に位置し、主郭を中心に曲輪が数方に組うられている。絶景である。
15	芦田氏居館跡	大字芦田字平芦田居敷	平地	218×108	滅滅	～戦国	芦田氏	芦田城跡の麓、芦田氏の居住に位置していたと考えられている。今は開墾はなり。

跡（立科町）（T50）がある。東に目を転ずると、布施川流域には、東南東約1.4km 離れて布施城跡（247）、南東約2.6km 離れて式部城跡（255）が、いずれも左岸にある。また、布施川右岸には東約1.8km には細久保城跡（240）、北東約2.0km には虚空蔵城跡がある。佐久市（旧浅科村）には、約2.8km 離れて矢嶋城跡（A2）、約3.2km 離れて天徳城跡（A3）がある。

近接した地域に城館跡が点在する地域ではあるが、ほとんどの城跡で発掘調査はなされていない。わずかに望月城（望月町教委1985）や、矢嶋城の試掘調査結果（浅科村教委1985、1991、1996）が示されている。また、城館跡周辺の村落や耕地を含めた場所の発掘調査もこれからと言える地域で、中世の土地利用・景観の復元も今後の課題の一つである。

第３節　調査への課題

以上、天神城跡とその周辺に関する考古資料、および文献資料による天神城跡の研究を踏まえ、今回の調査の課題を上げておくこととする。

①北東側斜面に堀が存在するのか　この地区（１区）では、２・３次調査報告書で指摘された11番堀の南側に竪堀が続くのかが課題の一つである。

②平坦部での城郭関連施設の検出　この地区（２区）では、県教委による分布調査や、第２・３次調査報告書で指摘された八の郭以南に郭施設が続くのか、あるいは防御施設ではない居住城などの痕跡が見つかるのかが焦点となる。

③平坦部での耕地開発時期　２区に城郭関連施設や居住施設がなかった場合、現代に続く水田の開発時期を明らかにする必要がある。また、桜井氏が推定する中世まで遡り得るかを確認する。

④南東側斜面部の段状地形は曲輪であるのか　この地区（３・４区）では、第２・３次調査で確認された曲輪の構築時期が課題の１つである。３次調査では、曲輪部分の表土下（盛土上部）で遺構検出を行っている。詳細が触れられていないため建物跡などの遺構は存在しなかったと見られる。そのため、今回

の調査では下部の盛土層を調査対象として、段の構築状況と構築時期を解明することとしたい。

また、不明確になっている段状平場の構築時期と目的を明らかにすることが2つめの課題である。

⑤平坦部に城郭成立以前の遺構・遺物はあるのか　可能性が比較的高い段丘上の平坦部（2区）を対象として、1～3次調査で遺物が確認されている縄文や古代に関わる遺構・遺物の検出に努める。

調査前に設定した主要な課題は、以上5項目である。さらに、調査状況によって必要となれば、課題を追加してゆくこととした。

引用・参考文献

浅科村教育委員会　1985『矢嶋城跡―緊急発掘調査報告書―』
浅科村教育委員会　1991『矢嶋城跡―主郭部の試掘調査―』
浅科村教育委員会　1996『矢嶋城跡―村道2―8号線道路改良工事に伴う発掘調査―』
飯塚広行　1984「地形・地質」『天神城跡　緊急発掘調査報告書』國學院大學歴史考古學會
上代純一　1984「遺構」「まとめ」『天神城跡　緊急発掘調査報告書』國學院大學歴史考古學會
國學院大學歴史考古學會　1984　『天神城跡　緊急発掘調査報告書』
桜井松夫　1994「天神城跡」『望月町誌』第三巻　歴史編一　原始・古代・中世編
立科町教育委員会　1991『大庭遺跡』
長野縣　1936「天神林城跡」『長野縣町村誌』東信編
長野県教育委員会　1983『長野県の中世城館跡―分布調査報告書―』
望月町誌編纂委員会　1984『望月町誌』第三巻　原始・古代中世編
長野県教育委員会　1983『長野県の中世城館跡―分布調査報告書―』
望月町教育委員会　1981『望月町遺跡詳細分布調査報告書』
望月町教育委員会ほか　1985『望月城跡―緊急調査報告書―』
望月町教育委員会　1994『天神城跡―緊急発掘調査報告書（総括編）―』

1区斜面にトレンチを入れ堀を捜す

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　調査範囲

調査対象地区は天神城跡のうち、天神バイパス工事で掘削される部分である。そのため、トンネルとなる段丘上の平坦部は対象から除外された。トンネル部分を境に調査区は大きく２分される。一方は、協和（北西）側のトンネル坑口部分にあたる。もう一方は、春日（南東）側のトンネル坑口部分から台地南東斜面部にかけてである。対象面積は、延べ9,000㎡である（図７・８）。

２　発掘調査の方法

調査は県埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」を基準に実施した。以下、天神城跡に適用するための主要な部分について記しておく。

(1)　遺跡名・地区名・遺構名ほか

遺跡名称と遺跡記号　遺跡名は県教委作成の遺跡台帳に基づいている。また、遺物への注記などの便宜上、アルファベットの大文字３字による遺跡記号を設定している。１文字目は、長野県内を北から９地区に分割した仮地区名（佐久地域はD）、２・３文字目は遺跡の略号を示している。

遺跡名＝天神城跡、ふりがな＝てんじんじょうせき、遺跡記号＝ＤＴＪ

地区名　調査範囲全域が含まれる地区を、世界測地系のＸ・Ｙを基準として200ｍメッシュ（大々地区）に分け、ローマ数字のⅠ～Ⅵとした。大々地区は40ｍメッシュの大地区に分割し、Ａ～Ｙとした（図７）。さらに大地区は、８ｍメッシュ（中地区）に分割し１～25とした。

例えば、官公社の社殿の位置はⅡＶ７となる。平面図や遺物分布図は全てこの地区割を基準として作成した。

これとは別に、地形の変換部分や調査年次の違いによって、便宜的に付した仮地区名がある。

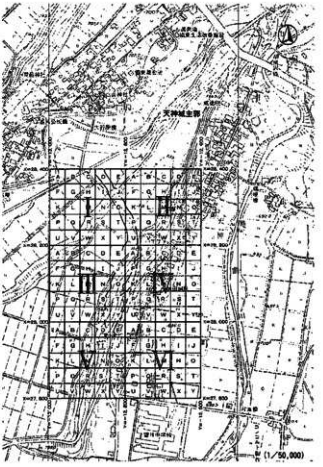


図７　地区設定図

図8　調査範囲およびトレンチ・面調査地区平面図

表３　仮地区の位置と調査時からの変更内容

仮地区名	地形区分	工事区分	調査年度	調査年度仮地区名
１区	台地北西側斜面部	協和側トンネル坑口	平成17年度	１区
２区	台地上平坦部	春日側トンネル坑口		２区平坦部
３区	台地南東斜面部	春日側トンネル坑口～切り通し部分		２区斜面部
４区	台地南東斜面部		平成15年度	①区（斜行道路以南）
				②区（斜行道路以北）

今回の調査では、城跡の主郭に近い地点から１～４に区分した（図８）。報文中にでてくる地区名は主にこの仮地区であり、発掘調査（原図や発掘調査日誌・遺物注記）時点の名称を多少変更してある（表３）。

遺構名　今回の調査では、溝・穴・焼土跡に個別記号と番号を与えた。

ＳＤ……溝、ＳＦ……焼土跡、ＳＫ……土坑（今回は、柱穴なども含めた）

(2)　測量の方法

城郭遺跡では、堀や曲輪などの施設が現地表面の起伏から読み取れる場合がある。そのため、平成14年度に、調査地区およびその周辺の地形測量を委託した。

地形測量作業

発掘調査においては、平成17年度調査の２区（２区平坦部）では、「方針と手順」に則して測量杭を設定し、この基準杭を基に遺構平面図や遺物分布図を手描きで作成した。また、トータルステーションによる地形測量を委託した。個々の手描き図面は、コンピューター上で地形測量図に合成した。

一方、他の地区は急斜面であり、手描きでは誤差が生じやすいため、断面図を除いて、トータルステーションによる測量を委託した。

(3)　遺構・遺物の調査方法

安全の確保　今回の調査区は急傾斜地での作業が中心となったため、２～４区では、調査地点までの作業道を重機により確保した（ｐ３写真）。また、１区では作業中の滑落を防止するために単管による柵・手すりの設置を行った（ｐ４写真）。これによって、安全が確保されしだいトレンチ調査に入った。さらに、４区（平成15年度調査区）では、調査終了後にトレンチを埋め戻し、土砂の流出を食い止めるため板柵を設置した。

４区・段のトレンチおよび面調査（平成15年度）

遺構・遺物の検出方法　斜面部（１・３・４区）と平坦部（２区）とでは異なる方法を用いた。

斜面部では、急傾斜のために足場の確保が難しいこと。また、予想される遺構が城郭に関わる堀・曲輪といった大形構造物であることを考慮した。まず最初にトレンチを設定し、断面観察によって遺構の把握に努めた。次に、トレンチ内で盛土下層から中・近世陶磁器類が出土した４区段７・８については、この層を覆土とする遺構の有無を確認するため、盛土下面（地山面）で面調査をおこなった。この段は、

斜面上部に位置し、第3次調査で曲輪の可能性が指摘された段である。また、比較対象のため、斜面下部で遺物の出土しなかった4区・段4についても地山上面での面調査を行った（p15写真）。

台地上の平坦部（2区）では、城郭の諸施設、あるいは城郭以外の遺構・遺物の存在も予想されたため、通常の調査方法をとった。すなわち、まずトレンチで基本土層を確認し、遺構が検出できる面を把握した。2区では、Ⅲ層に縄文時代～中世に関する遺物が包含されており、遺構検出面はⅣ層上面（あるいはⅤ層上面）であることが判明した。

次に、各々の検出面で手作業による遺構平面検出を行った。また、開田・ほ場整備時の攪乱を免れたわずかな範囲の遺物包含層（Ⅲ層）を手作業で掘り下げ、遺物出土状況を記録した。

遺構・遺物の調査方法　2区で溝と土坑、焼土跡が検出された。溝は断面観察用のベルトを残し、層位を確認しながら掘り下げた。遺物および多量に出土した礫も出土位置で残し、図化した。土坑・焼土跡は平面形を確認後、半割し、堆積状況や断面形の観察から人為的か否かを判断し、根痕と判断したＳＫ２は遺構から除外した。包含層出土遺物は、数量が少なかったため、分布図を作成して取り上げた。

3　資料整理・報告書作成の方法

遺物水洗から注記まで　遺物は少量であったため発掘調査の雨天時などを利用して水洗を実施した。注記は、約2cm以上の破片について実施した。それ以下と、剥離痕が全面におよぶ黒曜石製の石器については、収納袋への注記とした。注記記号は、ＤＴＪを筆頭に地区名・遺構名・取上番号の順とした。遺構名を明記したものは地区名を省略した。また、地区名は発掘調査時の地区名（表3参照）のままである。

例えば、溝跡ＳＤ２から出土した取り上げ番号４番の土器は、**ＤＴＪ　ＳＤ２　ｐ４**　である。

また、主な略号は、　**トレ＝トレンチ　カク＝攪乱**

表＝表採　表土＝Ⅰ層　　である。

報告書掲載遺物　報告書掲載遺物の抽出は、遺構の時期決定に必要な土器・陶磁器類を極力掲載する方向で抽出した。しかし、細片が多く実測点数は8点にとどまった。また石器類は、器種が判別できる例を主に掲載した。

遺物の水洗作業（平成17年度）

遺物図作成作業（平成17年度）

実測・トレースは、実測班および寺内がおこなった。また、遺物写真撮影はデジタルカメラを使用して寺内が行った。

遺構・全体図類の整理　最初に、デジタル化された委託図面類と、個別遺構などの手描き図面類の統合を行った。手描き図の平面図・遺物分布図・断面図の照合ののち、委託図との照合を行いデジタル図面の中に組み込む方式をとった。

報告書掲載図面　デジタルトレースされた図と、それ以外のトレース図を併用した。

整理収納　報告書刊行後は、資料を地元教育委員会に移管することを前提とし、県埋文センターの移管資料一覧に則って、図面記録類、写真記録類、遺物、台帳などの整理・収納を行った。

第２節　層　序

１　基本土層

遺跡における堆積、埋没、攪乱などの状況を把握し、発掘調査方法の策定の基礎となるのが基本土層の確認である。これによって、遺構検出面の確定、残存状況の把握、トレンチ調査か全面調査か、などの方針を定めた。

基本土層は全地区で共通する大区分をローマ数字のⅠ～Ⅴ層とした。その上で、各地区やトレンチ毎に変化する層については算用数字で表記した。よって、算用数字については断面図毎に独立した層になっており、共通名称ではない。対比される層については文章で記載した。基本土層は以下の通りである（図９～16参照）。

Ⅰ層　表　　土……現耕作土、および現在の植生や人為的に攪乱された層
Ⅱ層　旧耕作土・盛土……近世～昭和時代、ほ場整備前の水田層および攪乱（盛土）層
Ⅲ層　土壌化した自然堆積層……黒色～黒褐色土（10YR2/2～3/2）。粘性ややあり、しまりあり。礫などの混入ほとんどなし。縄文時代～中世の遺物が包含される。
Ⅳ層　土壌化が不充分な自然堆積層…暗褐色土（10YR3/3）。黒色土とローム層との漸移層。上面で縄文時代以後の遺構確認を行った。
Ⅴ層　地　山（自然堆積層）……褐色火山灰ほか、部分的に自然礫を多量に混入する。上面が遺構確認の最終面である。

２　各地区の状況

１区（図９）　10～40cmほどⅠ層が堆積し、直下がⅤ層となる場合が多い。一部でⅡ層（盛土層）が認められる。盛土の時期ははっきりしないが、黒色土（Ⅲ層）などがまったく含まれないため、近世以降、耕地を造成した時の道や段（平場）に関連するものと考えられる。

２区（図13）　縄文時代～中世にかけての包含層が唯一残存する地区である。Ⅰ層は、ほ場整備時の攪乱層・盛土層、そして現在の水田土壌からなる。この地区のⅡ層は、ほ場整備前の水田土壌であり、1974年作製の『県営ほ場整備事業望月地区第３工区測量図』に示された水田区画に一致することから、昭和時代の水田土壌と考えられる。Ⅲ層の大半はⅠ・Ⅱ層によって削平されており、Ⅳ・Ⅴ層にまで攪乱がおよぶ部分が多い。Ⅲ層の最も厚い所で約25cm、Ⅳ層の最も厚い部分は50cmほどである。Ⅴ層は、上部にローム層が見られる、ローム層は20～50cmほどで砂礫層（上位段丘礫層）に移行する。

３・４区（図13・15・16）　棚田状の耕地が広がる斜面部である。段（平場）造成時に削平された傾斜面ではⅠ層直下がⅤ層になり、平場部分は旧耕土と厚い盛土（Ⅱ層）に覆われている。

Ⅱ層は斜面上部と中～下部で若干様相が異なる。斜面上部では、黒褐色から暗褐色を呈する層や、砂礫を含む層が認められる。一方、斜面の中～下部では、大量の礫などを含む盛土（７トレンチⅡ－２層など）が認められる。前者は、各段近辺の斜面部を掘削した時に発生した土砂で盛土を構築したと見られ、後者では、該当部分の地山には含まれない礫を多量に使用していることから、砂礫土を運び込んで段の基盤を造成していたと見られる。いずれにせよ、近世以降に造成されたことは確実で、Ⅲ層や中世遺構の覆土と同一の黒色土は確認されなかった。

第３節　各地区の調査概要と検出遺構

１　１区の調査（平成17年度１区）

(1)　調査地点と調査の課題

天神城跡11番堀以南で、堀の確認へ　１区は、協和側のトンネル坑口部分にあたっている（図８・９）。八丁地川に面した段丘北西側の急斜面である。勾配は約30°をはかる。天神城跡主郭からは、南西方向に約250m離れた地点である。天神城跡では、同一斜面側に竪堀などが集中的に設置されており、これまで11本が確認されている。確認済みの11番堀は七の郭と八の郭境の北東斜面に設置されており、１区までの距離は約35～65mを計る。今回の主要な課題は、12本目の堀の有無を確認することであった。

(2)　調査方法と結果

等高線に沿うトレンチ　まず、樹木や下草の伐採後、現況図と併せて表面観察を行ったが、堀と判断できる凹みはなかった。ただし、斜面途中の畑（現在は荒れ地）へ登る道があり、堀か古道の転用の可能性が考えられるため、トレンチを設定した。トレンチは堀の確認を主目的としたため、また、安全面を考慮して、斜面に直交させて等高線に沿う形とした。斜面のほぼ中央、標高728m付近に設定した。

遺構確認できず　全長約28.6m、幅0.4～0.5mを表土から人力で掘り下げた。地表から15～120cmほどで地山の砂礫層に達し、堀と見られる掘り込みやその他の遺構も確認できなかった。一部で盛土が認められたが、中世に遡る遺物は出土していない。現況図に対比すると、盛土の範囲は小字名の「本城」と「大行原」境で斜面を登る道および平場（畑）とほぼ一致しており、ごく新しい時期の盛土と考えられる。以上、少なくともバイパス路線内には堀および曲輪などの施設が存在しないことを確認した。

２　２区の調査（平成17年度２区平坦部）

(1)　調査地点と調査の課題

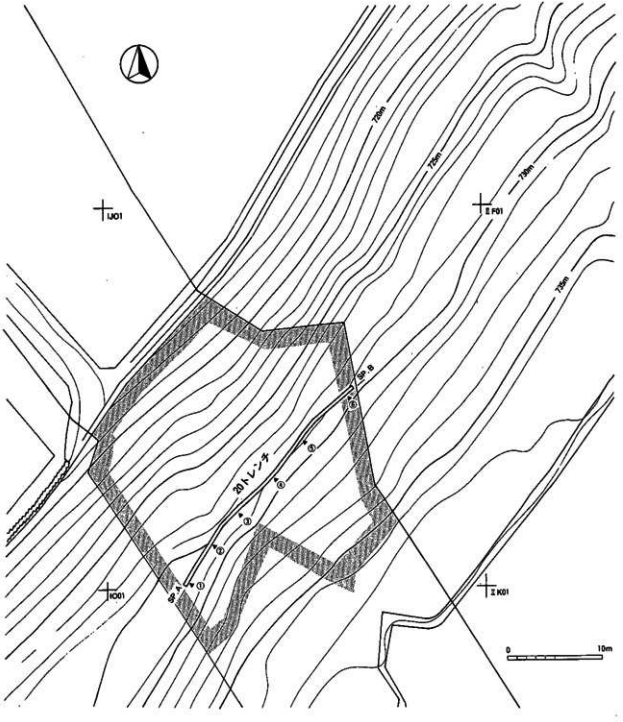
天神城跡南側の平坦部　２区は春日側トンネル坑口部分で、段丘上の平坦地にあたる（図８・10）。この地区は、天神城跡の乗る段丘上のうち鹿曲川に面しており、南東側斜面への地形変換点際にあたる。ほ場整備事業によって平坦に見えるが、本来は南東に向かって傾斜していたと見られる。天神城跡主郭から南南西に約350m離れている。現地表面で標高738mを計り、鹿曲川側の平地との比高差は約40mである。

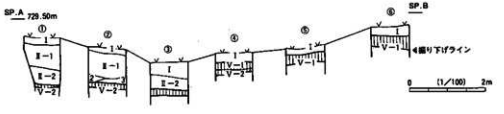
城郭関連施設などの確認　すでにほ場整備事業が行われているため、地形や境界が若干変化しているが、調査区北側の道路が小字名「本城」と「塚田」の境にあたっている。望月町教委の詳細分布調査（1981）、長野県教委の分布調査（1983）で堀の可能性を指摘された場所（図３・６）である。現状でも、この道路を挟んで大きな段差が認められたが、この地を耕作されている方の話では、この段差はほ場整備時に造成したものだと言う。この段差・道路部分は調査対象外であるため、段差が堀の名残であるのか、まったく新たに造成したものであるかは不明である。

こうした状況を踏まえて、２区では、「本城」の南端付近での城郭施設の確認、境界に関する施設の確認、城の外郭に存在する居住地施設などの確認が主目的となった。また、段丘上の平坦地であるため、中世以前の時代の遺構・遺物の確認が第２の課題となった。

(2)　調査方法と結果

トレンチによる堆積状況の確認　地元の方によると、ほ場整備事業に伴って他地域からの土砂運搬による盛土や尾根の削平など、地形改変が行われたとのことであった。そのため、まず先行トレンチ（21トレン





Ⅰ層表土　川～黒褐色(10YR1/1.7～2/3)腐植した落葉、根などを多量に含む森林土壌。
Ⅱ層盛土
Ⅱ－１　暗褐色(10YR3/3)しまり強、径1～5cmの礫を多量混入。
Ⅱ－２　黒褐色(10YR2/3)　〃　、径1～5cmの礫の間に砂が入る。人頭大の礫混入。
Ⅱ－３　褐色シルトと暗褐色土(Ⅱ－2層)が混在。
Ⅴ層地山
Ⅴ－１　にぶい黄褐色(10YR4/3)火山灰が主体となる。Ⅴ－2層の崩落土と見られ、しまりが悪い。径1～3cmの礫混入。
Ⅴ－２　褐色　火山灰、しまりがひじょうに強い。

図９　１区全体図および20トレンチ柱状図

チ）を設定して、堆積状況や包含層の残存状況を確認した。その結果、旧水田の斜面側で黒色土の包含層が残存していることが判明した（図13）。

さらに、ＳＤ３の落ち込みが確認できたため、その掘り込み上部である黒色土（Ⅲ層）下面で、１回目の遺構検出を行うこととした。その後、Ⅳ層を掘り下げ、Ⅴ層上面で再度遺構検出作業を行った。

漸移層上面と地山上面での遺構検出　Ⅳ層（漸移層）上面では、溝や土坑を確認することができた。また、Ⅲ層が中世～縄文時代の包含層であることが判明した。検出された遺構は中世の溝３条、時期不明の土坑（ピット）が４基と、焼土跡１箇所である。

出土遺物は、近世以降の陶磁器類27点、中世の焼き物類７点、古代の須恵器ほか３点、縄文土器17点、時期不明焼き物23点、石器76点、金属製品３点を数えた。

検出された遺構　個別の遺構について説明を加える（図11～13）。

ＳＤ１（図10～12）　Ⅲ層掘り下げ中に確認されはじめ、輪郭線が明瞭にできたのはⅣ層上面である。長軸N59°Ｗ、ほぼ直線に延び、ＳＤ２に並行する。ＳＤ２との距離は検出面で約3.5mを計る。検出できた長さは2.53mにすぎず、幅は25cmである。断面形は緩やかな傾斜を示し、深さはⅣ層上面から６cmと浅い。黒褐色土が一様に堆積しており流水の痕跡は認められない。遺物は出土していない。

ＳＤ２（図10～12）　Ⅲ層掘り下げ中に確認されはじめ、輪郭線が明瞭にできたのはⅣ層上面である。N56°Ｗ方向にほぼ直線的に延び、台地を横断する形を示す。ＳＤ１に並行し、ＳＤ３とは直交する。ただし南東側が攪乱によって削平されているため、ＳＤ３との接点部分の状況は不明である。また、３区の18トレンチで確認されなかったため、城郭中心域の堀とは異なり、斜面部に続くことはなかったと見られる。

調査区内での全長は15.5mを計り、最大幅は検出面で2.1mである。断面形はＶ字状を呈しており、一部で中央部分を垂直に掘り下げて漏斗状に近い形になっている。ただし、最下部は礫層を掘り込んでいるためか整えられていない。礫も残存した状態のままであり、底面の傾斜や形状を整える必要性の少ない溝だったと考えられる。深さは約60cmを計る。堆積状況は、大きく５層に分かれる。全体的に人為的な埋め戻しや土塁の崩落土などは認められない。最下層（５層）には先述したように下部に礫が大量に認められるが、石積みのための加工などはない。また、水路底面にある流水の痕跡（ラミナなど）も認められない。３層が最も黒色化しており、長期に渡って凹地となっていたと見られ、遺物量も５層に次ぐ。

遺物は、ひじょうに少量で、中世かそれ以前の焼き物・石器である。Ⅱ層などに含まれる近世以降の遺物が皆無であることから、中世に機能・埋没していた溝と考えられる。

ＳＤ３（図10～13）　Ⅲ層掘り下げ中に確認され、輪郭線が明瞭にできたのはⅣ層上面である。N42°Ｅ方向にほぼ直線的に延び、段丘縁辺部に沿う。また、ＳＤ２との位置関係は前述したとおりである。攪乱によって削平されており、想定されるＳＤ２との交点付近の状況、北に続くか否かも不明である。

確認できた長さは26.5mを計り、検出面での最大幅は1.5mである。断面形はＶ字状を呈しており、一部で中央部分を垂直に掘り下げて漏斗状に近い形になる。深さは約50cmを計る。堆積状況はＳＤ２に類似している。ただし、底部が礫層に達していないため、最下層に混入する礫は少ない。

遺物は、縄文時代の石器のみで、溝の時期を決定できるものは皆無である。溝の断面形や規模、あるいは堆積土の類似性、配置がＳＤ２に直交している点などから、ＳＤ２と同時代の溝と考えられる。

ＳＫ１・３～５（図11・12）　いずれも径25cm前後である。ほ場整備時の削平により消滅したＳＫがあった点を考慮しても規則性はなく、掘立柱建物跡や柵列を形成する可能性は低い。ＳＫ２は根痕と判断した。

ＳＦ１　Ⅳ層上面で検出された風倒木痕の覆土上部にあった焼土跡である。ＳＤ２に切られる。遺物は素焼きの土器極細片１点のみである。時期、性格、人為的か否かなどは不明である。

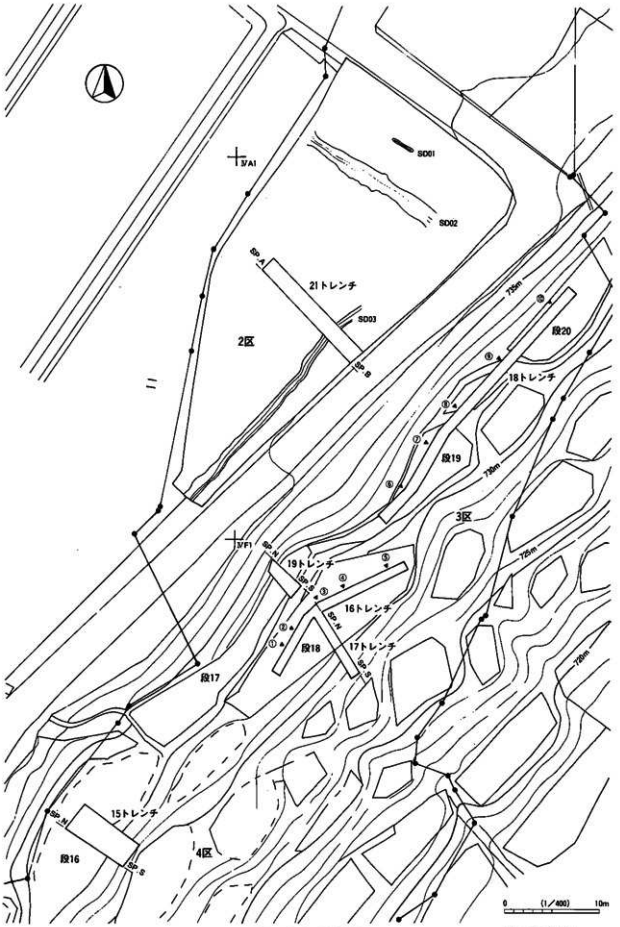

3/A1
SD01
SD02
21トレンチ
SD03
2区
72m
段20
18トレンチ
段19
73m
3区
3/F1
19トレンチ
16トレンチ
段18
17トレンチ
段17
76m
15トレンチ
段16
4区
0
(1/400)
10m
路線幅
平場(段)

図10　2区・3区全体図

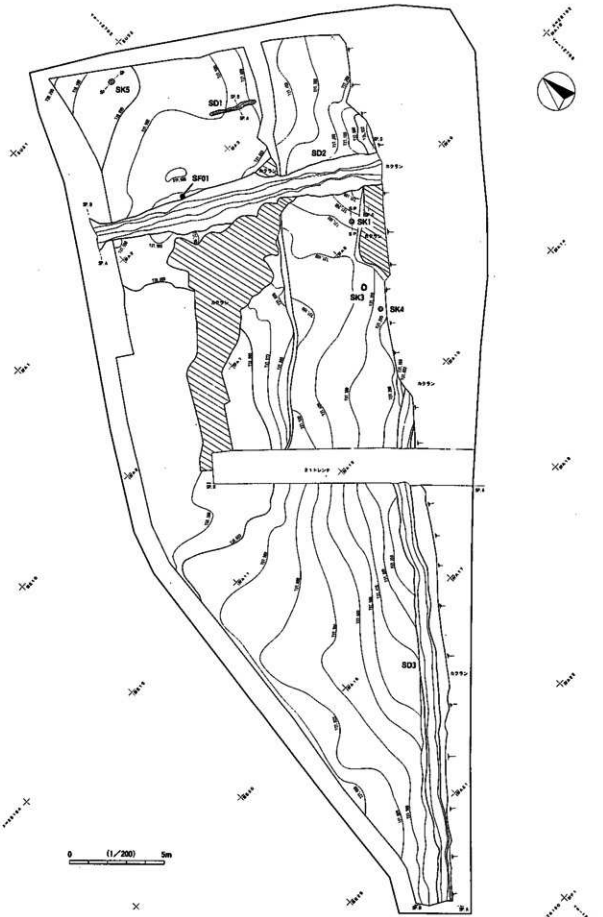


図11　2区全体図

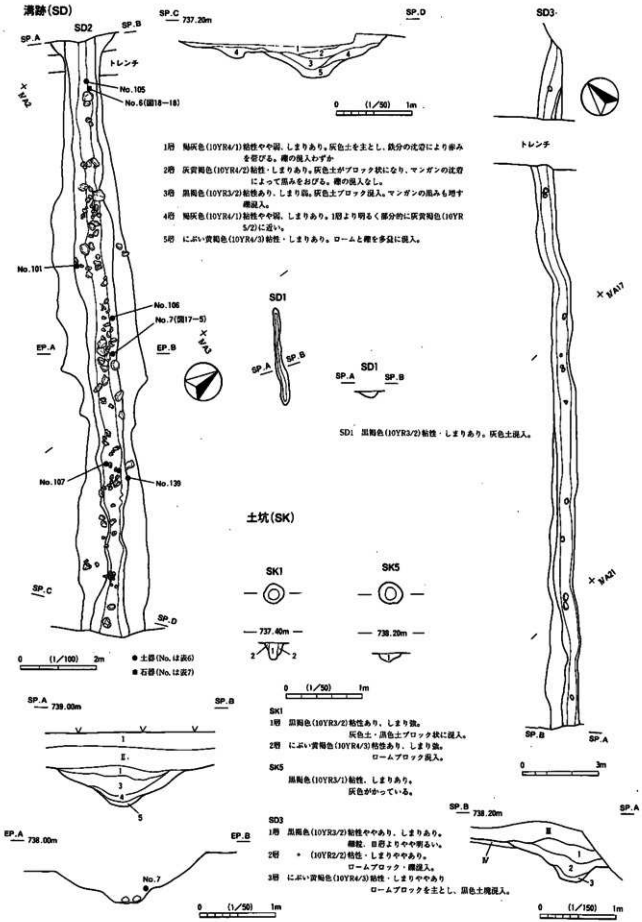

溝跡(SD)
SD2
SP.A
SP.B
トレンチ
No.105
No.6(図18−18)
No.101
No.106
No.7(図17−5)
EP.A
EP.B
No.107
No.139
SP.C
SP.D
0 (1/100) 2m
● 土器(No.は表6)
■ 石器(No.は表7)
SP.C 737.20m
SP.D
0 (1/50) 1m
1層 褐灰色(10YR4/1)粘性やや弱、しまりあり。灰色土を主とし、鉄分の沈着により斑みを帯びる。礫の混入わずか
2層 灰黄褐色(10YR4/2)粘性・しまりあり。灰色土がブロック状になり、マンガンの沈着によって黒みをおびる。礫の混入なし。
3層 黒褐色(10YR3/2)粘性あり、しまり弱。灰色土ブロック混入。マンガンの黒みも増す礫混入。
4層 褐灰色(10YR4/1)粘性やや弱、しまりあり。1層より明るく部分的に灰黄褐色(10YR 5/2)に近い。
5層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性・しまりあり。ローム土と礫を多量に混入。
SD1
SP.A
SP.B
SD1
SD1 黒褐色(10YR3/2)粘性・しまりあり。灰色土混入。
土坑(SK)
SK1
SK5
737.40m
738.20m
0 (1/50) 1m
SK1
1層 黒褐色(10YR3/2)粘性あり、しまり強。
灰色土・黒色土ブロック状に混入。
2層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性あり、しまり強。
ロームブロック混入。
SK5
黒褐色(10YR3/1)粘性、しまりあり。
灰色がかっている。
SD3
トレンチ
SP.B
SP.A
0 3m
SP.A 739.00m
SP.B
EP.A 738.00m
EP.B
No.7
0 (1/50) 1m
SD3
1層 黒褐色(10YR3/2)粘性ややあり、しまりあり。
礫殺、Ⅱ層よりやや明るい。
2層 〃 (10YR2/2)粘性・しまりややあり。
ロームブロック・礫混入。
3層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性・しまりややあり
ロームブロックを主とし、黒色土塊混入。
SP.B 738.20m
SP.A
0 (1/150) 1m

図12　2区遺構個別図

中世土地区画溝の検出　以上、2区では中世の可能性が高い溝3条などを調査した。3条の溝は、わずかな出土遺物ではあるが、天神城が機能していた時期に存在していた可能性が高い。SD1・2は1～11番堀とほぼ並行しており、SD3は段丘上縁辺部でこれに直交している点から、城郭との関連性は高いと見られる。城域内を区画した溝の可能性はあるが、主郭周辺の堀に比べ幅や深さが1／5程度にすぎず、防御機能としては劣っている。また、流水の痕跡はなく、底部が安定していないため水路ではなさそうである。SD1・2が現在の小字名「本城」と「塚田」との境、SD3が小字名「塚田」と「水白」の境にほぼ一致しており、土地境界を明示するための区画溝の存在が踏襲されていることは明白である。溝に区画された内部は、ほ場整備事業による削平が進んでおり、建物などの施設が存在していたかは不明である。

中世の遺物が極端に少ないことから、居住施設からは比較的遠い地点であったと考えられる。

3　3区・4区の調査（平成17年度2区斜面部・平成15年度①・②区）

(1)　調査地点と調査の課題

天神城跡南東側斜面部の調査　春日側トンネル坑口部分から、段丘南東側斜面部にあたる。平成15年度と17年度の2ヶ年に渡って調査を実施した。現地では年度毎に仮地区名を付けてあったが、ここでは、天神城主郭に近い地点から平成17年度分を3区、平成15年度分を4区として報告を行う。

棚田状の平場（段）の構築時期　この地区は、天神城跡の乗る台地の鹿曲川（南東）側に面した斜面部である。勾配は20～30°を計る。天神城跡主郭からは南南西方向に約350～500m離れた地点である。

中世城郭では防御のために、斜面部に平場（曲輪）を設ける場合がある。長野県教委の分布調査（1983）によると、段丘上平坦部直下の段を曲輪に想定している（図6）。また、望月町教委の報告（1994）でもその可能性を示唆している。斜面中・下部の段（平場）については、主郭からはかなりの距離がある上、その間の斜面部には曲輪を想定できるような平場は存在していない。そのため、後世の耕地造成による可能性が高いが、確認しておく必要が生じた。

このように3・4区では、曲輪の可能性が示唆されている上部の段（平場）を含めて、段状の地形が城郭に関連した曲輪であるのかどうかを確認すること。曲輪であるかないかは別として、人為的な段が造成された時期と構造を明らかにすること、が課題となった。

(2)　調査方法と結果

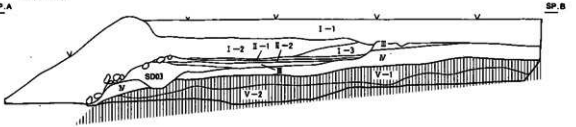
トレンチ中心の調査方法　ここでは、トレンチによって各段の構築状況や構築過程、構築時期を把握することを優先した。トレンチは20ヶ所の段に対して、等高線に直交する方向に17本設定し、段中央部を等高線に沿って横断するトレンチを2本設定した（図10・14、表3）。

トレンチ調査によって、斜面上部の段7・8盛土下層から中・近世陶磁器が出土した。この段については、望月町教委によって盛土上面での平面精査が実施され曲輪の可能性が指摘されていた。しかし、今回のトレンチで近世遺物が出土したため、古い段（曲輪）が下層に存在するのか、あるいは段そのものの構築時期が新しいのかについて確証を得ることを目的に、盛土下での面調査を実施した。さらに、これらの段と比較するため斜面下部にある段4についても面調査を実施した。平成15年度調査において、段構築時期が近世以降の可能性が強くなったため、平成17年度ではトレンチ調査にとどめた。

段の構築状況と時期　番号を付した段1・5・9・12については、出水処理用水路設置、および安全確保用の道路造成のため調査を行わなかった。以下、各段の状況について概要を記す（図13～16）。

段2・3（3・4トレンチ）　旧水田層のⅡ－1層中からは、18世紀代と思われる伊万里焼片から現代の碍子まで出土している。下層の盛土層からは時期決定できる資料はない。しかし、地山から水田層までの盛土積み上げ方には、他段と共通する一連の流れが認められる。すなわち、

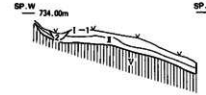
2区　21トレンチ



Ⅰ層　表　土
　－1　現水田耕作土。
　－2　オリーブ褐色(2.5Y4/4)土体、水田層土がブロック状に混在。
　－3　1－2層に層混土がブロック状に混在。
Ⅱ層　旧耕作土
　－1　褐灰色(10YR4/1)粘性ややあり、しまりあり。シルト質の層混層。
　－2　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性ややあり、しまりあり。鉄分の染褐想。
Ⅲ層　強合層
　黒褐色(10YR2/3)粘性ややあり、しまりあり(Ⅱ層には劣る)。礫なく、砂を少量混入。
Ⅳ層　崩移層
　暗褐色(10YR3/4)粘性やや弱、しまりあり。礫がまれに混入する。
Ⅴ層　地　山
　－1　褐　色(10YR4/6)火山灰。粘性ややあり、しまりあり。径1～5cmの礫を散見混入(Ⅴ－2層地に多い)。
　－2　礫　層　Ⅴ－1層をマトリックスとする弱利～人頭大の礫。

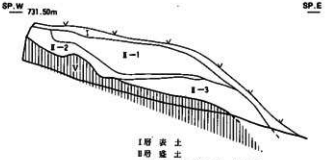
3区

19トレンチ



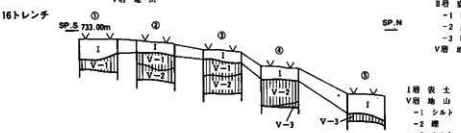
Ⅰ層　表　土
　－1　黒褐色
　－2　黒　色　根切り痕。
Ⅱ層　盛　土　礫と褐色土が混在した整地層
Ⅴ層　地　山

17トレンチ



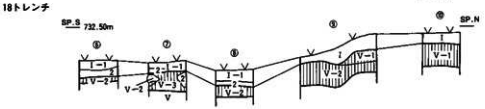
Ⅰ層　表　土
Ⅱ層　盛　土
　－1　暗褐色　粘性なし。小礫混入。
　－2　黒褐色　粘性なし。こぶし大の礫多量混入。
　－3　暗褐色　粘性なし。
Ⅴ層　地　山

16トレンチ



Ⅰ層　表　土
Ⅴ層　地　山
　－1　シルト
　－2　礫
　－3　シルト

18トレンチ



Ⅰ層　表　土
　－1　黒褐色土
　－2　暗褐層
Ⅴ層　地　山
　－1　シルト
　－2　礫
　－3　シルト

4区

15トレンチ(段16)

Ⅰ層　表　土
　－1　黒褐色(10YR3/2)粘性・しまりなし。
　－2　暗褐色(10YR3/3)粘性・しまりあり。暗灰色化した水田土壌。
　－3　鉄分染褐層。
Ⅱ層　盛　土
　－1　暗褐色(10YR3/4)粘性・しまり弱。径0.5cm程度の礫15%程度混入。
　　新規の盛土。
　－2　黒褐色(10YR2/3)粘性・しまりなし。径4～10cmの礫で構成される。
　　新規の盛土。
　－3　暗褐色(10YR3/4)粘性・しまりなし。4層に粗砂が多量混入。
　　新規の盛土。
　－4　黒褐色(10YR2/3)粘性弱、しまり強。径3cm～人頭大の礫30%程度混入。炭化物混入。段7・8の黒褐色盛土層に対応。
　－5　黒褐色(10YR2/3)6層に比べやや明るく、人頭大の礫を混入。
　－6　黒褐色(10YR2/2)粘性弱、しまりあり。径4～7cmの礫で構成。

図13　２区～４区トレンチ断面図および柱状図

① 地山を整形し、最下層に地山礫・シルトに黒色土を混在させた段の基盤層を積む（Ⅱ－5層）。

② 斜面側を安定させるため礫混じりの層を積む（Ⅱ－4層）。

③ 径の小さい礫を含む層を重ねて段を形成する（Ⅱ－3層）。

④ 斜面崩落を防止するために礫を多量に含み、大形礫を縁辺部に配した層を積む（Ⅱ－2層）。

⑤ その上に、耕土用の土壌を乗せ耕地を完成させる（Ⅱ－1層）。

といった工程がうかがえる。そのため、盛土は時期を隔てて積まれたものではなく、Ⅱ－1層の水田層を構築するための一連の造成と見られる。造成工事は、最も新しい出土遺物（碑子）に合わせると、水田耕作がされていた昭和30年代に限りなく近くなる。一方、Ⅱ－1層水田が長期に渡る継続的な耕土層と見れば、少なくとも近世（伊万里焼）まで遡る可能性がある。

段4（1・2トレンチ）　一連の段構築工程は、段の存在する場所の勾配や、地山を構成する段丘堆積物の差が反映されている。段4は比較的緩やかな傾斜地であったか、地山を大きく削り込んだためか、盛土量が少ない。また、当該地の地山にはない礫を含む土を選び込んで盛土基盤を形成している。①段階にⅡ－3層があたり、②段階にⅡ－2層があたり、Ⅱ－1層が④段階の崩落防止層にあたると考えられる。遺物の出土はないが、盛土の構築法から見るならば、段2・3と同時期に造成されたものと考えられる。

段6（5・7トレンチ）　斜面の崩落をおさえる④段階の対応層が見られないが、①段階のⅡ－2層（層相も段2～4の最下層と類似）、③段階のⅡ－1層が認められる。時期を決定できる遺物は出土していないが、盛土構築方法は上記の段と類似しており、同時期造成であろう。

段7（8トレンチ）・**段8**（10トレンチ）　8トレンチでは①～③段階の盛土としてⅡ－6層～Ⅱ－4層を想定し、④段階にⅡ－3・2層をあてることができよう。ただし、斜面崩落防止土としてはⅡ－3・2層はしまりが弱く礫の混入も少ない。9トレンチ・10トレンチでも同様の傾向が認められる。

8トレンチのⅡ－5層、10トレンチのⅡ－10層は炭化物が混入する黒褐色～暗褐色土を呈しており、他段の盛土下部層とは異なった様相を見せている。また、中・近世陶磁器類が混入している。一つの想定としては、段7・8が斜面上部に近い地点であるため、またまま盛土に利用した土砂中に段丘上から流れ込んだ陶磁器類が含まれていた可能性が考えられる。一方、この層の形成された時期が近世に遡り、古い盛土層の残存と見ることもできよう。この段のすぐ上段に、近世の石造物がある点からも、古い可能性があろう。ただし、結論を出せるだけの証拠はない。

段16（15トレンチ）　段丘上面に近い位置にあり、急傾斜地に段を構築するため、多量の土砂を用いている。①段階には地山掘削後に積んだ礫層があり、その上に大形礫を含む叩き締められた黒褐色土層などを盛って段16の基盤を作り上げている。Ⅱ－2層が斜面崩落をおさえる④段階対応層と考えられる。こう見ると、Ⅱ－6層からⅠ層までは、一連の盛土造成と考えられる。しかし、Ⅱ－3層とⅡ－4層間で大きな土質の変化が認められており、ここを境に別時期の盛土の可能性も残っている。

表4　3・4区トレンチ一覧

地区名	調査年度	調査時区地区名	トレンチ番号	段番号	方向(単位基本にして)	長さ(m)	幅(m)	掘削深度(m)	拡張区地山面出現(m)	出土遺物	備考
1	2005	1	20	—	平行	28.6	0.4	0.43～1.3	—	幕末以降陶磁器（碑文）	
2	2005	2区平坦部	21	—	直交	14.0	1.9	1.05～2.16	673.0	縄文土器、中世砂状、骨粗、内耳、近世陶磁器	
2	2005	2区平坦部	—	—	—	—	—				
3	2005	2区斜面部	16	18	平行	18.8	1.0	0.7～1.16	—	伊万里（表採）	
3	2005	2区斜面部	17	18	直交	7.5	1.0	0.35～1.58	—		
3	2005	2区斜面部	18	19・20	平行	31.2	1.0	0.5～1.01	—		
3	2005	2区斜面部	19	17	直交	4.2	1.0	0.08～0.38	—		
4	2003	①区	1	4	直交	5.9	0.9	—	73.0	—	
4	2003	①区	2	4	直交	7.6	1.0	0.13～0.85	—	—	
4	2003	①区	3	2・3	直交	11.4	1.2	0.4～1.33	—	伊万里、瀬戸美濃、在地鉄骨物	
4	2003	①区	4	2・3	直交	6.5	1.0	—	—	—	
4	2003	①区	5	6	直交	7.7	1.3	0.22～1.34	—	—	
4	2003	①区	6	8	直交	5.6	1.4	—	—	—	
4	2003	①区	7	6	直交	6.0	2.2	0.41～1.95	—	—	
4	2003	①区	8	7	直交	7.0	0.9	0.34～1.18	103.0	伊万里、瀬戸美濃、常滑焼、在地鉄骨物	
4	2003	①区	9	10・11	直交	25.6	2.3	0.32～2.36	—	六文	
4	2003	②区	10	8	直交	9.3	1.5	0.2～1.5	30.0	瀬戸美濃、常滑、在地鉄骨物	
4	2003	②区	11	8	直交	8.9	1.1	—	22.5	—	
4	2003	②区	12	15	直交	6.4	1.2	—	—	—	
4	2003	②区	13	14	直交	6.7	1.2	0.16～0.93	—	—	
4	2003	②区	14	13	直交	7.0	1.2	—	—	—	
4	2003	②区	15	16	直交	7.2	3.1	0.2～2.73	13.0	—	

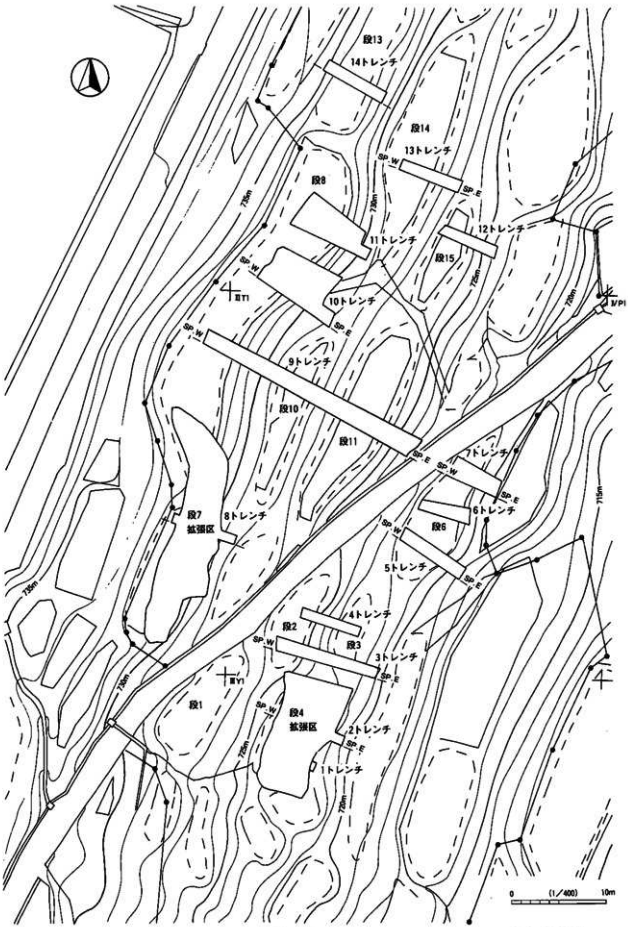
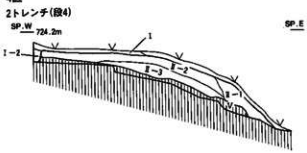


図14　4区全体図（15トレンチのみ図10）

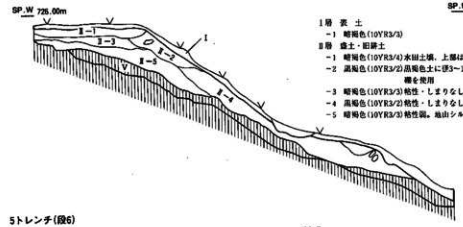
4区

2トレンチ(段4)



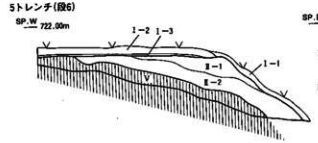
Ⅰ層　表　土
　－1　黒褐色(10YR3/1～3/2)溶解・集積なく樹枝土か、斜面部の色調やや暗い。
　－2　黒褐色(10YR3/1)シルトを含む砂質(崩)。
Ⅱ層　盛土・旧耕土
　－1　黒褐色(10YR2/3)しまりなし。径3～5cmの礫を多量混入。
　－2　暗褐色(10YR3/3)粘性・しまりなし。シルトに径0.5～1cmの礫を多量に混入。段2のⅡ－3層に類似。
　－3　黒褐色(10YR3/2)粘性弱、しまりあり。径2～4cm礫多量混入。地山シルトブロック混入。段2のⅡ－5層に対応。

3トレンチ(段2・3)



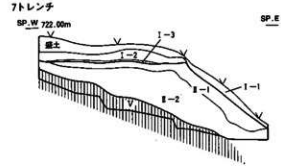
Ⅰ層　表　土
　－1　暗褐色(10YR3/3)
Ⅱ層　盛土・旧耕土
　－1　暗褐色(10YR3/4)水田土壌、上部は明灰色、下部は鉄分集積で褐色・黄褐色。
　－2　黒褐色(10YR3/2)黒褐色土に径3～10cmの礫を多量に混入。裁縫道部には径20cmの礫を使用
　－3　暗褐色(10YR3/3)粘性・しまりなし。暗褐色土に径1～3cmの礫を多量混入。
　－4　黒褐色(10YR3/2)粘性・しまりなし。黒褐色土に径0.5～1cmの礫を混入。
　－5　暗褐色(10YR3/3)粘性弱。地山シルトに地山礫を混入。

5トレンチ(段6)



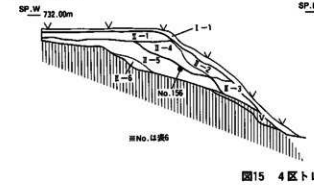
Ⅰ層　表　土
　－1　黒褐色(10YR3/2)
　－2　暗褐色(10YR3/4)水田土壌で、下部に集鉄層(－3層)あり。
Ⅱ層　盛　土
　－1　暗褐色(10YR3/3)粘性なし、しまり弱。暗褐色シルトに径0.5～1cmの礫混入。
　－2　黒褐色(10YR3/2)粘性なし、しまりあり。径1～3cmの礫多量混入。段2のⅡ－5層、段4のⅡ－3層に対応。

7トレンチ



5トレンチと同じ

8トレンチ(段7)

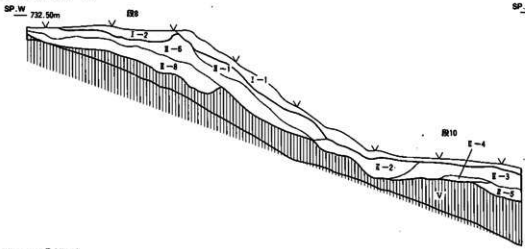


Ⅰ層　表　土
SP_E　－1　黒褐色(10YR2/3)
Ⅱ層　盛土・旧耕土
　－1　暗褐色(10YR3/3)水田土壌、上部暗灰色、下部に鉄分の薄い集積層。
　－2　暗褐色(10YR3/3)粘性なし、しまり弱。径0.5～1cmの礫混入。
　－3　黒褐色(10YR2/3)粘性なし。2層に近い土に径3～4cmの礫を多量(約40%)混入。
　－4　黒褐色(10YR3/2)粘性なし、しまりあり。地山のシルトに径0.5～2cmの礫を多量(約20%)混入。
　－5　黒褐色(10YR3/2)粘性なし。しまり強。シルトを主に若干砂を含む。径0.4～1cm礫を多量混入。
　－6　黒　色(10YR2/1)粘性なし、しまり弱。粗砂主体に5層土が混入。

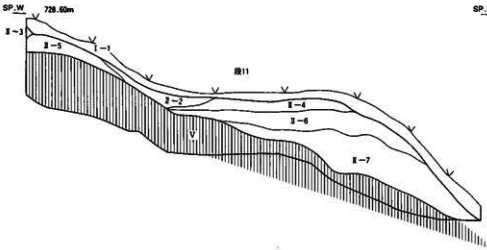
0　(1/100)　2m

図15　4区トレンチ断面図(1)

9トレンチ①(段8・10)

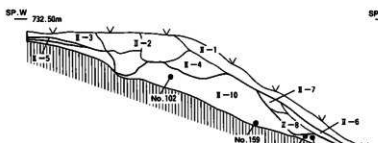


9トレンチ②(段11)



Ⅰ層　表　土
　-1　黒褐色(10YR2/3)
　-2　暗褐色(10YR3/3)近年のカクラン。
Ⅱ層　盛　土
　-1　黒褐色(10YR3/2)粘性なし、しまり弱。
　　径5cmほどの礫を少量混入。
　-2　黒褐色(10YR3/2)粘性なし、しまり弱。
　　黒褐色土に径5~10cm礫を多量混入。
　-3　暗褐色(10YR3/3)礫少量混入。旧耕土層。
　-4　暗褐色(10YR3/3)粘性・しまりあり。
　　暗灰色化した旧水田層
　-5　黒褐色(10YR2/3)粘性なし、しまり強。
　　黒褐色土に径5~5cmの礫を多量混入。
　-6　黒褐色(10YR2/3)粘性・しまりなし。
　　やや砂質、礫15%程度混入。
　-7　黒　色(10YR2/1)粘性なし、しまり弱。
　　径5~10cmの礫を多量に混入。段6層下部に類似。
　-8　黒　色(10YR2/1)7層に比べ礫が少なく、しまりが強い。

10トレンチ(段8)



Ⅰ層　表　土
　-1　黒褐色(10YR2/1)しまりなし。
　-2　暗褐色(10YR3/3)~黒褐色(10YR3/2)粗炭。
　-3　暗褐色(10YR3/3)新鮮の盛土。径0.5~1cmの礫を多量混入。
　-4　褐灰色(10YR4/1)新鮮の盛土。ほとんどが礫で占められる。
Ⅱ層　盛　土
　-5　黒褐色(10YR3/2)粘性なし、しまりあり。グライ化した灰色がかる。鉄分集積あり。
　　旧水田耕作土か。
　-6　黒　色(10YR2/1)粘性なし、しまり弱。礫15%程度混入。
　-7　黒褐色(10YR2/3)礫15%程度混入。
　-8　黒褐色(10YR2/3)径2~3cmの礫主体。
　-9　黒褐色(10YR3/2)径3~4cmの礫混在。
　-10　暗褐色(10YR3/3)粘性なし、しまり強。径0.5cm程度の礫混入、炭化物混入。

13トレンチ(段14)

Ⅰ層　表　土
　-1　黒　色(10YR2/1)しまりなし。礫混入。
　-2　暗褐色(10YR3/3)暗灰色を帯びる水田土壌。
　-3　褐　色　鉄分の集積層。
Ⅱ層　盛　土
　黒褐色(10YR2/2)粘性弱、しまりあり。シルトに径1~3cm礫が混入(約30%)

0　(1/100)　2m

図16　4区トレンチ断面図(2)

近世以降の耕地造成　以上、段を構成している盛土は出土遺物から見て、段7・8が近世まで遡る可能性を持つにとどまる。場合によってはこの段も含めて、近代以降に耕地開発の目的で造成されたとも考えられる。いったん中世に構築された曲輪を改修・再造成した可能性もないわけではないが、中世に遡る遺物がほとんど混入せず、段丘上の中世遺構（溝）の覆土や上層で認められた黒色土も存在していないことから、中世に遡る造作はなかったと見るべきであろう。ごくわずかに出土した中世の遺物は、段丘上に最も近い最上部の段8だけであった。これらの遺物は段丘上に存在する包含層からの転落か、盛土構築のために寄せ集めた土砂の中に含まれていたのであろう。

以上、現地表面で天神城の南東側斜面に認められた段は、中世の時期に、天神城に伴って構築された施設でない可能性が濃厚である。

第4節　出土遺物

1　城郭構築以前の遺物

(1) 縄文時代

土　器　2区から前期前葉の土器2点（図17―1・2）と、前期の可能性がある鉢の破片1点（3）が出土した。

石　器　石器および石核・剥片・砕片あわせて74点が出土した。地区別では、1区で1点、2区で71点、4区で2点となっており、台地上の平坦部での出土が圧倒的に多い。この内、表土や攪乱土中から出土した10点については、ほ場整備時に搬入された土砂に混入していた可能性もあるが、それ以外は現地性が高い。しかし、中世溝からの出土が大半で、包含層（Ⅲ層）中から出土した例は7点にとどまる。

内訳は表4に示した。定型石器には石鏃と礫器がある。石槍の未製品があること、2.8g～8.58gを計る小形の石核が存在し、剥片・砕片類が40点あることから、この地区か周辺で石器製作をおこなっていたと考えられる。石材では、小形石器72点中65点（90%）が黒曜石で占められる。これらは前期の土器に伴う可能性もあるが、時期を決定できる土器片が微量であるため断定はできない。後期旧石器時代や弥生時代の技法を示す石器などが存在していないことから、多くは縄文時代の石器であろう。

(2) 古　代

土　器　2区から須恵器の微細破片が2点出土した。また、ロクロ使用の素焼きの土器の微細破片が5点認められるが、中世の内耳土器との峻別が難しい。

2　城郭期（中世）の遺物

表5　出土石器の組成

時代	大区分	器種	点数	石材別点数				備考
				黒曜石			その他	
縄文時代	小形石器	石槍	2	1	1		チャート（赤色）	
		石槍未製品	1	1	0		―	
		くさび	6	6	0		―	
		RF	2	1	1		チャート	石槍未製品の可能性あるもの含む
		MF	10	10	0		―	ガジリの可能性あるもの含む
		石核	11	10	1		ガラス質安山岩	
		剥片・砕片	40	36	4		チャートほか	
	大形石器	礫器	1	0	1		輝石安山岩	
		磨石？	1	0	1		輝石安山岩	
中・近世	大形石器	石臼	1	0	1		安山岩	近世
		碁石	1	0	1		凝灰岩	中世
合　計			75	65	11			

中世陶磁器・焼き物　明確に中世と断定できる資料には、中国製の青磁片1点（図17―4）、常滑焼きの細片1点（巻頭図版2下）、在地製の素焼きの香炉1点（5）、および内耳土器の細片3点（6ほか）にすぎない。遺構に伴った事例は、SD2出土の香炉片のみである。ただし、古代～中世とした素焼きの土器が、内耳土器になる可能性が残っている。

砥　石　溝から多量の礫が出土したが、この時代

土器・陶磁器

縄文時代

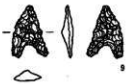
中世

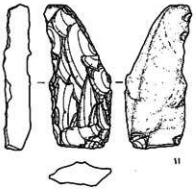
近世・近代

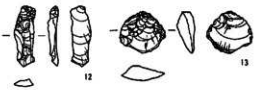
0　(1/2)　5cm

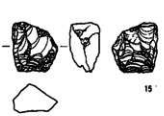
石器・石製品

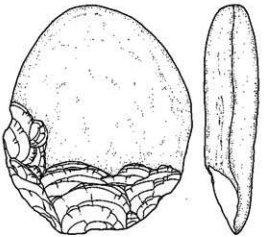
縄文時代

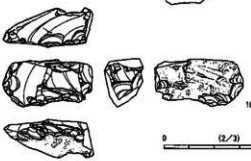












0　(2/3)　5cm

0　(1/3)　5cm

図17　出土遺物(1)

に比定できる石器・石製品はＳＤ２から出土した砥石片１点（図18―18）のみであった。

3　城郭廃絶後の遺物

近世以降の陶磁器　２区の溝、およびⅢ層からは１点も出土していないことが注目される。出土は全てⅠ・Ⅱ層中、および段状施設の盛土中である。近世陶磁器類は、古くて18世紀に遡る可能性をもつ例があるが、ほとんどが幕末以降に比定される。伊万里焼、瀬戸・美濃焼、それに在地（前山焼？）が加わる。すべて細片であるため、産地だけでなく器種も不明な例が多い。

石製品　１区のトンネル工事範囲内で、石臼片が１点採取された（図18―19）。二次的に割られ、形が整えられている。急傾斜地であり、斜面上方に耕地の土留め用の石垣が存在することから、石垣に転用されたものが落下した可能性が高い。二次加工は石を組む時点の加工と見られる。

金属製品　特筆されるものには、加工が施された「寛永通宝」がある（図18―20）。側縁を六角形に加工し、「寛」字の両側に小孔をうがっている。吊り下げるための孔であろうか。段７盛土中から出土した。

この他、キセルの吸口と、鉄製品１点が出土しているが、いずれも近代以降の可能性が高い。

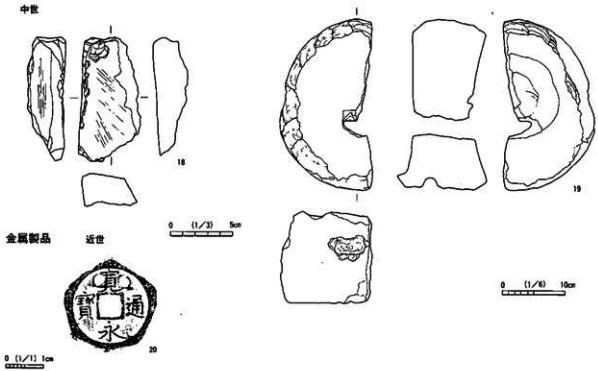


図18　出土遺物(2)

表6　出土土器・陶磁器一覧

調査年号	収納箱番号	仮地区	地点名	地区 グリッド名	層位	遺構	取上番号	器種	残存部位	法量 口径(mm)	底径(mm)	高さ(mm)	重量(g)	特徴	接合関係	時期	備考
17	1	11	2	平城部北東	—		掘乱	—	—	深鉢	胴部	—	—	—		11.1	縄文土器混入、LR縄文	縄期以降
17	3	9	2	平城部北東	—		掘乱	—	—	浅鉢	胴部	—	—	—		21.56	LR縄文別位横縄	縄期以降
17	3	10	2	平城部北東	X U23		第1	p3	—	鉢?	胴部	—	—	—		14.47	無文、沈線	弥生
17	4	8	2	平城部北東	—		掘乱	—	—	—	口縁	—	—	(2.2)		5.27	中国製青磁	14c 後半～15c 前半
後期																		日本へは16c末まで焼成の可能性有り
後期		103	2	21ライン	—		盛土内掘乱	—	—	陶磁器付属	胴部	—	—	—		23.34	唐津か	16c 末～19c 前
		125	2	平城部北東	X U23		第1	—	p1	第1	胴部	—	—	—		4.27	無文	古代
		126	2	平城部北東	X U23		第1	—	p2	第1	胴部	—	—	—		13.38	無文	縄文
		127	2	平城部北東	X U23		第1	—	p4		胴部	—	—	—	2次接合	7.98	沈線一条あり	縄文
		128	2	平城部北東	X U23		第1	—	p5		胴部	—	—	—		7.89	無文	縄文
		129	2	平城部北東	X U23		第1	—	p6		胴部	—	—	—		1.18	無文	縄文
		130	2	平城部北東	X U23		第1	—	p7		胴部	—	—	—		5.56	無文	縄文
		131	2	平城部北東	X U23		第1	—	p3?		胴部	—	—	—	2次接合	10.72	無文	縄文
		132	2	平城部北東	V A8		第1	—	p1		胴部	—	—	—		3.15	無文、長石	縄文
		133	2	平城部北東	V A8		第1	—	p2	第1	胴部	—	—	—		5.4	無文	古代～中世？
		134	2	平城部南西	—		検出面	—	—	不明	胴部	—	—	—		7.77	長石含む	3次(接合不可) 縄文？
		135	2	平城部北東	—		掘乱	—	—		胴部	—	—	—		6.25	無文	不明
		136	2	平城部北東	—		掘乱	—	—	内耳か？	胴部	—	—	—		5.84	無文	中世？
		137	2	平城部北東	—		掘乱	—	—		胴部	—	—	—		4.43	無文	不明
		138	2	平城部北東	—		掘乱	—	—	浅鉢	胴部	—	—	—		3.81	LR縄文	縄文前期前葉
		140	2	平城部北東	—		掘乱	—	—		底部	—	—	—		20.8		
後期		141	2	平城部南西	—		最新盛土内(L層)	—	—		胴～底	—	—	—		11.61	瀬戸焼造	近代
後期		142	2	平城部南西 21ライン	—		L層	—	—		胴～底	—	—	—		9.36	瀬戸焼造	近代	新国図中ポイント有
17	5		2	平城部北東	—		—	SD02	p4	壺形	口縁	12.8	—	(3.7)		30.29	在地製	15～16前
後期		158	2	平城部北東	—		—	SD02	p2	壺？	胴部	—	—	—		23.52	須恵器	古代
後期		166	2	平城部北東	—		—	SD02	p1	鉢？	胴部	—	—	—		6.98	無文	古代～中世？
		106	2	平城部北東	—		—	SD02	p1		胴部	—	—	—		3.33	無文、長石	縄文～古代
		107	2	平城部北東	—		—	SD02	p7	壺？	胴部	—	—	—		5.98	無文	古代～中世？
		109	2	平城部北東	—		—	SD02	—	深鉢	胴部	—	—	—		4.29	縄文入り、長石	2次接合 縄文前期前葉？
		110	2	平城部北東	—		—	SD02	—	壺？	胴部	—	—	—		8.2	無文	古代～中世？
		111	2	平城部北東	—		—	SD02	—		胴部	—	—	—		1.71	無文、長石	不明
		112	2	平城部北東	—		—	SD02	—	深鉢	胴部	—	—	—		9.14	縄文風化して不明	縄文前期か
		113	2	平城部北東	—		1層	SD02	—		胴部	—	—	—		9.52	無文、長石	古代～中世？
		114	2	平城部北東	—		1層	SD02	—		胴部	—	—	—		4.39	無文	不明
		115	2	平城部北東	—		1層	SD02	—		胴部	—	—	—		4.52	無文	不明
		116	2	平城部北東	—		1層	SD02	—		胴部	—	—	—		1.74	無文、長石	不明
		117	2	平城部北東	—		盛土	SD02	—		胴部	—	—	—		5.06	無文、長石	縄文？
		118	2	平城部北東	—		盛土	SD02	—		胴部	—	—	—		3.12	無文、長石	縄文？
		139	2	平城部南西	—		—	SD02	p5		胴部	—	—	—		7.36		
		119	2	平城部南西	—		—	SD03	—		胴部	—	—	—		1.31	無文、長石、長石	不明
		120	2	平城部南西	—		—	SD03	—		胴部	—	—	—		2.04	無文、長石、長石	不明
		121	2	平城部南西	—		—	SD03	—		胴部	—	—	—		1.49	無文、長石、長石	不明
		122	2	平城部南西	—		—	SD03	—		胴部	—	—	—		1.32	無文、長石、長石	不明
		123	2	平城部南西	—		—	SD03	—		胴部	—	—	—		0.47	無文、長石、長石	不明
		124	2	平城部南西	—		—	SD03	—		胴部	—	—	—		1.38	無文、長石、長石	2次(接合不可) 不明
		108	2	平城部北東	—		—	SF01	—		胴部	—	—	—		1.48	無文、長石、長石	縄文～中世？ SD02盛土部分
		104	3	到達部	—		表採	—	—		胴部	—	—	—		5.95	伊万里	18c 以降
17	7	4	4	H15年度U区	—		表採	—	—		胴部	—	4.2	(1.8)		33.72	地方焼？	幕末以降
		165	4	H15年度U区	—		表採	—	—	深鉢？	胴部	—	—	—		7.58		縄文
		166	4	H15年度U区	—		表採	—	—	内耳	胴部	—	—	—		9.04		中世
		167	4	H15年度U区	—		表採	—	—	染付	底部	—	—	—		2.08	瀬戸焼造	近代
		168	4	H15年度U区	—		表採	—	—	染付	胴部	—	—	—		18.63	瀬戸焼造	19c 以降
		143	4	第2	—		盛土	—	—	平瓦	体部	—	—	—		12.41		
		144	4	第2	—		盛土	—	—		口縁	—	—	—		1.33	伊万里	18c
		145	4	第2	—		盛土	—	—	硯？	口縁	—	—	—		2.98		近～現代
		146	4	第2	—		盛土	—	—		胴部	—	—	—		2.09	瀬戸焼造	近代
		154	4	第3	—		1層	—	—	平瓦	体部	—	—	—		69.07		
		155	4	第3	—		1層	—	—	平瓦	体部	—	—	—		48.99		
		147	4	段3(3ライン)	—		1層	—	—	硯？	胴部	—	—	—		4.58	在地製？	幕末以降
		148	4	段3(3ライン)	—		1層	—	—		胴部	—	—	—		2.03	在地製？ (切込焼？)	幕末以降
		149	4	段3(3ライン)	—		1層	—	—	片口	胴部	—	—	—		11.36	在地製？ (切込焼？)	幕末以降
		150	4	段3(3ライン)	—		1層	—	—	硯？	胴部	—	—	—		1.72	瀬戸焼造	19c 以降
		151	4	段3(3ライン)	—		1層	—	—	硯？	胴部	—	—	—		2.18	瀬戸焼造	19c 以降
		152	4	段3(3ライン)	—		1層	—	—		胴部	—	—	—		0.84		近代
		153	4	段3(3ライン)	—		1層	—	—	平瓦	体部	—	—	—		148.64		4次(接合不可)
		156	4	段7(8ライン)	—		盛土	—	p1	天目茶碗	胴部	—	—	—		17.12		桃山中期～新しい
		157	4	段7(8ライン)	—		盛土(5層)	—	—	灰釉鉢	口縁	—	—	—		0.67	瀬戸焼造	近世
		159	4	段7(8ライン)	—		盛土	—	—	陶磁器付属	胴部	—	—	—		11.41	伊万里	18c 末～19c SPA-SPA'2個？
		163	4	段9	—		10層(最下部の盛土)	—	—		胴部	—	—	—		1.28	瀬戸焼造、長石	不明 SPA-SPA'付近
		164	4	段9	—		10層(最下部の盛土)	—	—	灰釉丸碗	口縁	—	—	—		1.63		近世
		169	4	段9	—		盛土	—	—	硯？	口縁	—	—	—		14.21		近～現代
17	8	1	4	段8(10ライン)	—		盛土	—	p4	片口鉢	口縁	—	—	(2.9)		6.49	地方焼？	幕末以降
後期		102	4	段8(10ライン)	—		盛土	—	p1		口縁	—	—	—		6.67	伊万里	4次接合 18c
		159	4	段8(10ライン)	—		—	—	p2	悪形碗	口縁	—	—	—		3.33	瀬戸焼造	近世
		160	4	段8(10ライン)	—		—	—	p3	内耳	胴部	—	—	—		19.9		中世
		161	4	段8(10ライン)	—		12層(最下部盛土)	—	—		胴部	—	—	—		10.34	常滑	中世
17	8	1	4	段8(10ライン)	—		8T 0(1層)	—	—	内耳	底部	—	—	(2.6)		27.26		不明
		162	4	段8(10ライン)	—		10層(最下部盛土)	—	—		胴部	—	—	—		3.18	須恵器？	古代 SPA-SPA'付近

表7　出土石器一覧

※剥片・屑片は除く

調査区番号	遺構番号	出土番号	地区			層位	遺構	取上番号	器種	特徴	欠損部位	法量				石材	備考
			区画	地点名	グリッド名							長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
18	19	5	1	—	—	表採	—	—	石臼		再加工	273	152	149	6020.00	安山岩	石場の一部として使用か
—	—	152	2	平場部南西	—	検出面	—	—	くさび	小形、薄手、長方形	ほぼ完存	16	9	3	0.25	黒曜石	
—	—	158	2	平場部南西	—	盛土	—	—	石核	円礫を打割、剥離くずで廃棄か	ほぼ完存(残核)	47	41	17	26.80	黒曜石	
17	16	19	2	平場部北東	5/A7	盛土	—	—	石核	小形、剥片も取りづらく廃棄か	ほぼ完存	36	16	15	8.58	黒曜石	
—	—	154	2	平場部北東	—	盛土	—	—	石核	小形、自然面を打面、両極剥離部分有り、側面剥離あり	折れ(全長不明)	34	19	8	2.80	黒曜石	
17	17	20	2	平場部北東	5/A16	盛土	—	—	磨器	大形、片刃(一部表面にも剥離あり)	ほぼ完存	181	150	44	1505.66	輝石安山岩	
17	10	12	2	平場部北東	—	—	SD02	—	石鏃	凹基	片脚先端のみ	18	11	2	0.37	チャート	赤色
17	15	18	2	平場部北東	—	—	SD02	—	くさび	厚みのあるタイプ	ほぼ完存	20	18	13	4.79	黒曜石	
—	—	109	2	平場部北東	—	—	SD02	—	くさび	基部側に潰みあり、先端折れ	ほぼ完存	25	12	10	2.67	黒曜石	
—	—	110	2	平場部北東	—	—	SD02	—	くさび・MF	やや細のあるくさび、1側縁に小剥離	ほぼ完存	27	16	8	2.98	黒曜石	
—	—	119	2	平場部北東	—	—	SD02	—	くさび	幅広、薄手	半損	18	12	5	0.77	黒曜石	
17	11	14	2	平場部北東	—	—	SD02	—	RF(石鏃未製品か)	粗い片面剥離のみ	基部折れ	58	26	10	16.09	黒曜石	
17	13	16	2	平場部北東	—	—	SD02	—	RF	石鏃未製品の可能性あり	下端部	17	18	6	1.52	黒曜石	
17	14	17	2	平場部北東	—	—	SD02	—	RF	片側縁、両面剥離剥離	折れ(全長不明)	22	19	8	3.85	チャート	
—	—	106	2	平場部北東	—	—	SD02	—	MF	3側縁に微細な連続剥離・刃部か	一部一部欠け	20	14	2	0.55	黒曜石	
—	—	107	2	平場部北東	—	—	SD02	—	MF	ガジリか?	ほぼ完存	22	19	9	2.91	黒曜石	
—	—	120	2	平場部北東	—	—	SD02	—	MF	不規則・ごく少数の剥離	特になし	32	19	8	2.74	黒曜石	
—	—	102	2	平場部北東	—	—	SD02	—	石核	やや横長の剥片を剥離	ほぼ完存(残核)	60	27	13	17.70	ガラス質安山岩	
—	—	108	2	平場部北東	—	—	SD02	—	石鏃?	ほとんどの剥離面風化、使えなかった石石か?	一部一部欠け	22	18	12	4.39	黒曜石	
—	—	116	2	平場部北東	—	—	SD02	—	石核	小形の残核、アトランダムに剥離	特になし	27	20	16	7.64	黒曜石	
—	—	117	2	平場部北東	—	—	SD02	—	石核	小形の転石、ほとんど剥離せず廃棄	特になし	29	18	15	6.30	黒曜石	
—	—	118	2	平場部北東	—	—	SD02	—	両極剥離の石核?	小形の扁長剥片を剥離、3側面が自然面。くさびとすればやや肉厚	特になし	30	20	9	5.18	黒曜石	
18	18	6	2	平場部北東	—	—	SD02	—	砥石	小破片のため詳細不明	基部近くの剥片のみ残存	50	26	15	18.01	凝灰岩	
17	9	13	2	平場部南西	—	—	SD03	—	石鏃	凹基	先端・脚先端欠一部	22	14	5	0.61	黒曜石	
17	12	15	2	平場部南西	—	—	SD03	—	くさび?	小形、薄手、長方形	上端部折れか?	24	9	4	0.58	黒曜石	
—	—	132	2	平場部南西	—	—	SD03	—	MF	1側縁に連続剥離	折れ(全長不明)	32	14	6	2.20	黒曜石	
—	—	133	2	平場部南西	—	—	SD03	—	MF	2側縁に連続剥離、1側縁は刃部	ほぼ完存	21	18	10	2.22	黒曜石	
—	—	134	2	平場部南西	—	—	SD03	—	MF	1側縁に連続剥離	一部一部欠け	15	13	5	0.66	黒曜石	
—	—	139	2	平場部南西	—	—	SD03	—	MF	1側縁に連続剥離、3面は自然面	半折?	25	23	9	3.39	黒曜石	
—	—	140	2	平場部南西	—	—	SD03	—	MF	1側縁に微細な連続剥離	ほぼ完存?	19	12	3	0.38	黒曜石	
—	—	131	2	平場部南西	—	—	SD03	—	石核	小形	半折?	31	23	10	5.55	黒曜石	
—	—	137	2	平場部南西	—	—	SD03	—	石核	小形、2面は自然面	半折?	33	20	15	8.15	黒曜石	
—	—	138	2	平場部南西	—	—	SD03	—	石核	小形、1側面は自然面	ほぼ完存(残核)	34	25	10	6.82	黒曜石	
—	—	147	2	平場部南西	—	—	SD03	—	磨石?	棒状、肉眼で自然礫との区別難しい	完存	127	69	47	666.18	輝石安山岩	
—	—	154	4	段丘下部の盛土9トレ	—	10層	—	—	MF	1側縁に微細な剥離	ほぼ完存	27	18	6	2.90	黒曜石	SPA—A'付近
—	—	165	4	段丘下部の盛土10トレ	—	12層	—	—	MF	1側縁に微細な剥離、ガジリか?	ほぼ完存	20	19	3	1.12	黒曜石	

第４章　成果と課題

第１節　防御機能を中心とした城郭施設の有無について

ここでは調査前に掲げた課題のうち、今回の調査範囲内の所見から導き出せる城郭の範囲や構造について、成果と今後の課題について触れる。

１　主郭の南西側および南東側斜面における堀の有無について

天神城の段丘上や北西側斜面には11本の堀（堀切り・竪堀）が存在しており、11番堀以南にも堀が存在するかどうかが課題での一つであった。今回の調査区は、これまでの分布調査（望月町教委1981、長野県教委1983）、当センターが実施した現況測量調査、のいずれにおいても堀の痕跡が認められなかった地点であったが、発掘調査によって「ない」ことが確定できた。

このことは、郭や堀が集中的に配置された城の中核地区に比べ、南西側に離れた当該地区が防御的な色彩の薄らぐ地区であったと捉えることができたよう

２　段丘上における城郭関連施設の有無について

段丘上の平坦部では、城郭に関わる防御施設やその周囲に配置された居住施設などの有無が中心課題であった。また、この段丘上の水田開発が中世まで遡るのか、といった点も課題であった。

調査の結果、この地区で検出された主な遺構は溝跡のみであった。その一因には、ほ場整備事業によって旧地形が削平されており、遺構有無の判断ができなかったことにある。掘り込みの深い溝跡だけが残存し、柱穴などは消滅してしまった可能性は否定できない。微量な遺物の地点別出土量比を見ると、ＳＤ３や調査区南西側で中世の遺物が１点もないのに比べ、ＳＤ２やその周辺では３点（内耳土器の可能性を持つ素焼き土器を含めると７点）の出土が認められている。このことを積極的に評価するならば、中世の何らかの施設が存在した場所は、２区の北側に当たる段丘中央寄りの地点であったのかも知れない。

また、溝跡は水路として使用された痕跡がないため、用水とは考えられない。

このように、２区では、城郭に関連する防御施設や関連遺物の出土はなかった。しかし、調査範囲はひじょうに狭いものであり、今後、周辺地区の調査によって中世における段丘上の利用方法などが明らかにできるであろう。また、溝跡の性格については、次節で触れることとする。

３　段状の平場は城郭に伴う曲輪であるのか

２次・３次調査で、斜面上部の段については主郭近くの曲輪の構造と類似している点から、曲輪の可能性が指摘されていた（望月町教委1994）。ただし、構築年代については明確にされなかった。そのため、今回の調査では上記の段を含めた全ての段について、防御施設としての曲輪に該当するのか、その他の目的で造成されたのかを明らかにすること、構築された年代を解明することを課題とした。

調査の結果、曲輪の可能性が指摘されていた段７・８の盛土層下部から、近世以降の陶磁器片などが出土したため、現況で確認できる段は少なくとも近世以降の構築物であることが判明した。

また、斜面中～下部の段は、天神城主郭から南へ350m以上離れた地点からはじまり、集中する地区はさらに主郭から遠ざかる部分である。このことは、城の防御施設（曲輪）としては疑問符のつく場所であった。一方、段が展開する斜面部は、段丘上を走る用水堰が天神集落側へ流下する地点にあたっており、この地区の段丘上には水田が広がっている。そして段状の平場が途切れる地区から北側（主郭より）では、段丘上においても土地利用が水田から畑に変化している。また、この地区が断崖に近い傾斜を持つ天神城跡の斜面において、比較的緩やかな傾斜を示す唯一の場所でもある（図3）。このことは、段の性格が斜面部への水回し、および耕地開発の容易さと関連していることをうかがわせる。端的に言えば、段状の平場の大半は、段丘上の用水「天神（林）堰」開削以降に、水田開発を主眼に造成された可能性が高いと言えよう。その時期は、出土遺物から古く遡っても近世以降と考えられる。

ただし、近世以降の造成によって中世の曲輪が破壊された場合も想定されよう。しかし、天神城主郭との間に曲輪の存在しない地区が続くこと、段状の平場から構列・建物・土塁などの施設跡が一切認められないこと、中世に遡る遺物がほとんど出土しないこと、中世の包含層である黒色土層が存在しないこと、などから総合的に判断して、防御施設としての曲輪が存在していた可能性は皆無に等しいであろう。

4　城郭関連施設の有無と調査地点の位置づけ

以上、いずれの調査地区においても、調査前の課題にあげた城の防御施設に関わる遺構は見つからなかった。よって、各々の調査区がすでに天神城の城域外であったか、あるいは城域内とすれば比較的防御の必要性が低い、城の中核部から遠い地区であったことを示している。

中世の遺構としては、2区で3条の溝跡が見つかっている。この溝跡の性格を解明することが、今回の調査の成果であり、あらたな課題になると考えられる。次節で、この点について触れていきたい。

第2節　城と関連性を持った土地区画溝について

1　段丘上で検出された溝跡について

溝跡の特徴　溝跡の主な情報を再整理しておこう。わずかな出土遺物から判断して、溝が埋没をはじめたのは15～16世紀の可能性が高い。また、溝の断面形は箱薬研などとされるもので、中世の溝に特徴的な形状を示している（渋江1992）。規模は、上端の最大幅でも約2mで、深さも50～60cmにすぎず、上端の最大幅が10mを越え、深さも4mに達する堀切り（國學院大學歴史考古学會1984）に比べ見劣りする。また、傾斜も緩やかである。しかも、香炉の出土した層から溝上面までは、分層が難しいほど均一な堆積層が続いており、16世紀前半以降、長期にわたって自然埋没した可能性が高い。望月地区では武田軍の侵攻により16世紀後半にはたびたび戦乱に巻き込まれている（桜井1994）。この時期に、緩傾斜の浅い溝を自然埋没に任せていたとするならば、この溝自体は防御的性格とは無縁であった可能性が高い。

一方、溝底は礫層に当たる地点では整形もされず凹凸を残したままであった。覆土中に定期的な水流を示す痕跡もない。このことは、水路としての機能を持っていないことを示している。

次に、溝の位置関係について見てみよう。ＳＤ１とＳＤ２は、天神城跡の主郭周辺の堀にほぼ並行して設置されており、ＳＤ３はこれに直交し、段丘縁辺部近くに配置されている。この点は、城との関連性を示している。また、ＳＤ１とＳＤ２が現在の小字名「本城」と「塚田」の境、ＳＤ３が「塚田」と「水白」の境にほぼ一致している（図21）。少なくとも「本城」と「塚田」の境は、その地名から、中世以来の境界線を反映している可能性が考えられよう。

以上、今回発掘された溝の特徴は、①防御的な性格が弱いこと、②水路ではないこと、③城との関連性があること、④土地区画の境界線上に掘られた可能性が高いこと、の4点で把握することができる。

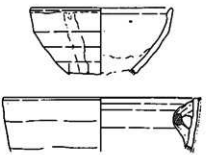
2　溝の類例とその性格について

赤須城跡の例　次に、溝と溝に囲まれた空間の性格を明らかにするため、発掘調査の実施された類例を求めて行くことにする。信濃国の城郭において、河岸段丘を利用する点で類似した例は伊那谷に多く見られらる（河西1992）。その代表例として、駒ヶ根市・赤須城跡例（駒ヶ根市教育委員会1980）（河西1990）（図19）をあげておこう。

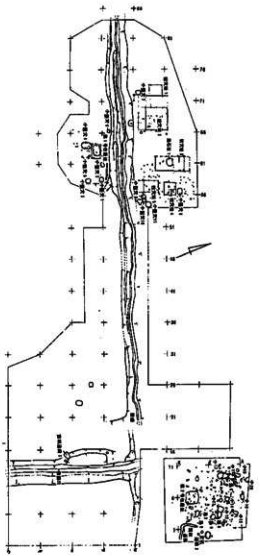
この城跡は、天竜川の河岸段丘上にあり、川に向かって楔状に狭まる先端付近に主郭を置くこと、背後の平坦面が城の主体部よりも標高が高く、そして広くなること、といった立地条件が天神城跡と一致する。さらに、主郭から約200～400m後方の段丘上で、堀で区画された居住域が検出されており、堀からは16世紀代の内耳土器や天目茶碗が出土している。時期や城の後方に溝が存在する点でも天神城跡と類似する。

この事例を参考にすると、天神城跡の南側段丘上にも城関連の諸施設が展開していた可能性が出てくる。

地形測量図と調査範囲(1／10,000)



横堀No.6出遺物(1／6)



遺構全体図(1／1200)

図19　駒ヶ根市・赤須城跡（駒ヶ根市教委1980より）

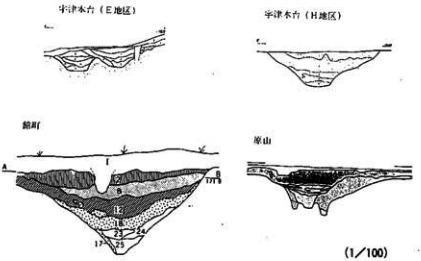


図20　中世区画溝の断面形（渋江1992より抜粋）

赤須城跡では堀に沿って無遺構地帯があり、天神城跡2区もこうした無遺構地帯にあたる可能性がある。一方、赤須城では、施設の密集する地点の堀が幅6mを計る規模を有しており、防御的な性格が強いと言えよう。この点では、天神城の溝との差異が際だっている。

中世区画溝　次に、溝の形態や規模の類似、あるいは水路機能を有していない点、堆積状況が主に自然埋没であること、後世の地割境界と一致すること、などの条件から類例をあげると、渋江芳浩氏によって注目された関東地域の中世区画溝があげられる（渋江1992）（図20）。時期的には11世紀以降に掘削され、15世紀以降に廃絶された例が示されている。これらの溝は、防御的な性格のものでも水路でもなく、中世の土地区画を明示するために、丘陵上や低地部をつなぎ延々と掘られた溝である。

この場合、2区の位置づけは天神城の防御的な性格の城域（狭義の城）を外れ、別の性格を持つ土地であった場合も出てくる。

機能分化した天神城跡の範囲　今回の調査では、残念ながら2区の土地利用方法を明らかにできるだけの資料が得られなかった。しかし、城の存続時期に、堀と並行、あるいは直交して段丘縁辺部付近をめぐる溝が発見された意義は大きい。一つは、この区域が、城郭中枢部と何らかの関連性を持っていたことが明確となった点。もう一つは、防御施設が密集する「八の郭」以北とは異なった機能を持った地区が、城の南側に展開していたことが明確になった点である。

第3節　新たな課題

今回の調査区は、現況で城郭施設が明確な地区よりも南側が対象となった。その最大の成果は、15～16世紀初頭の遺物を含む溝が確認されたことである。ここでは、その結果を踏まえて、いくつか今後の課題をあげておきたい（図21・付図）。

①「八の郭」あるいは「本城」地籍より南側段丘上の防御施設について　まず、推定された段丘上の堀（望月町教委1981、長野県教委1983）が実際に存在するのかといった課題である。前節では、防御性の低い区画溝の可能性も示しておいた。戦時下の防御を主眼とした堀か否かという点は、城郭を防御施設の明確な範囲に限定して考えた場合、城域を確定する上で重要となろう。

②「八の郭」あるいは「本城」地籍より南側段丘上の土地利用について　堀、あるいはSD2・3規模の区画溝が続いていた場合、それによって区画され、囲まれた範囲にはどのような施設が配置されていたのかが次の課題となろう。それは、居住施設、耕地、墓地、それ以外なのか。それらが城と一体となった施設なのか、一線を画したものなのか、といった点である。

③諸施設の構築された時期、および変遷過程について　これまで、時期決定資料がほとんどないため触れてこなかったが、少なくとも溝跡の埋没状況から(a)15～16世紀初頭に比定される在地製香炉片が埋没する

図21　天神城跡周辺の小字名と城館跡

以前（溝構築）の段階。(b)在地製香炉片が使われていた段階。(c)その後、溝が埋没してゆく段階、の3時期に段丘上の利用方法がどのように変化したかを明らかにする必要があろう。ちなみに、(b)段階は、城主の可能性があるとされる依田小隼人ら、在地の勢力が活躍した時代であり、(c)段階は、武田軍が信濃に攻め込み望月を中継拠点としていた時期から江戸幕府成立までの時代にあたる。

④中世における天神林地区の景観を復元する　課題は段丘上の狭い範囲に止めることはできない。中世の在地社会を解明するには、段丘下の集落域や耕地、氾濫原、あるいは、現存している五輪塔など、一定地域に広がる中世遺構群を総合的に捉え、景観を復元することが必要となってこよう。

⑤中世以前、あるいは近世以後の土地利用について　この段丘上からは縄文時代や古代の遺物が採取されており、古墳も見つかっている。各々の時代の段丘上の利用方法と、その変遷過程を明らかにしてゆくことで、中世の土地開発の特徴が見えてくるであろう。一方、3・4区の段状耕地の造成が近世以降であったことを踏まえて、戦国時代の動乱が静まった後の耕地開発の動きも把握しておく必要があろう。これによって、隣接する五郎兵衛新田との開発形態の比較も可能となってこよう。

これらの課題は、ほ場整備事業によって地表面の状況が改変されてしまった現状では、発掘調査による残存遺構の確認に頼る以外に方法はない。今後の発掘調査に期待される部分である。また、今回入手することができなかった明治時代の地籍図や古絵図などの分析を加える必要があろう。

渋江氏は「考古学的には中世を『堀の時代』あるいは『溝の時代』」と呼んでも差し支えないほど溝跡が発達するとしている（原田・渋江1994）。そして、中世村落景観の復元のため、溝跡の調査が重要な位置を占めるとした。今回の溝の発見で、その区画内が中世に利用されていたことは明白となった。今後は、城域の内か外かといった関係にこだわるのではなく、防御施設の集中する城中核部のほか、居住域・墓域・生産域などを考慮に入れた中世村落景観の復元を視野に入れ、この地域の分析を進めて行く必要があろう。その端緒を開く意味でも、今回の溝跡の発見は意義深いものとなろう。

引用・参考文献

飯村　均　1999「『館跡』『城跡』という遺跡」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集

河西克造　1990「長野県　35赤須城跡」『中世末～近世のまち・むらと都市』第3分冊中部・近畿の一部編

河西克造　1992「甲信地方における最近の中世城館跡調査―信濃国を中心として―」『考古学ジャーナル』353

上代純一　1984「まとめ」『天神城跡緊急発掘調査報告書』

木内　克　1997「天神城（嵩邑城・天神林城）」『定本　佐久の城』郷土出版社

駒ヶ根市教育委員会ほか　1980『日向坂・赤須城跡・七免川A・七免川B遺跡』

桜井松夫　1994「天神城跡」『望月町誌』第3巻歴史編一原始・古代中世編

渋江芳浩　1992「中世区画溝に関する覚書―中世東国における村落景観復元の手がかりとして―」『東京考古』第10号

長野県教育委員会　1983『長野県の中世城館跡―分布調査報告書―』

横口宏志　1990「中世東国の居館とその周辺一南関東におけるいつくかの発掘調査事例から―」『日本史研究』330号

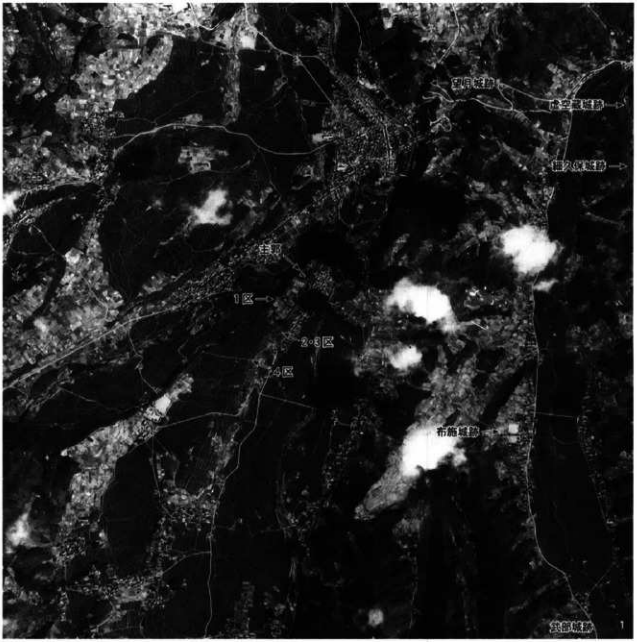
原田信男・渋江芳浩　1994「中世村落の景観復元について―東京都日野・八王子地区を中心に―」『札幌大学女子短期大学部紀要』第23号

福島邦男　1994『第頁章総括』『天神城跡―緊急発掘調査報告書（総括編）―』望月町・望月町教育委員会

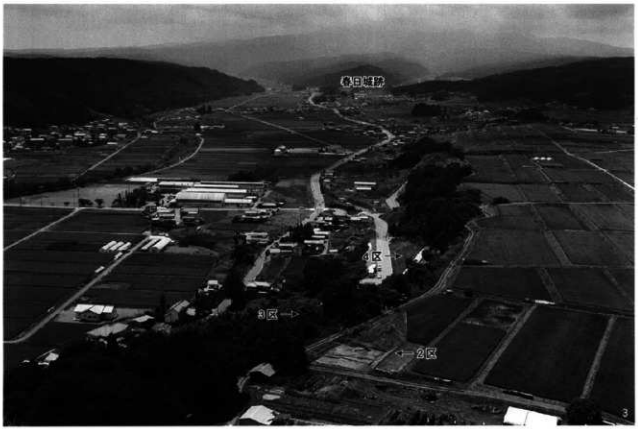
宮坂武男　2000『望月町　天神城（天神林城・高邑城）』『図解　山城探訪』第八集　佐久北部資料編　長野日報社

望月町教育委員会　1981『望月町遺跡群詳細分布調査報告書』

1：天神城跡の位置
（1947年米軍
撮影に加筆）



2：天神城跡遠景
（南より）



3：天神城調査区
遠景（北より）

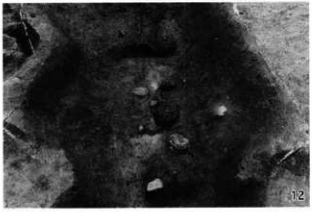
1区
4：1区遠景（西より）
5：1区全景（西より）

6：20トレンチ
完掘状況
7：20トレンチ
断面

2区
8：SD1
完掘
9：SD1
断面

10:SD2
遺物出土状況
11:SD2
断面

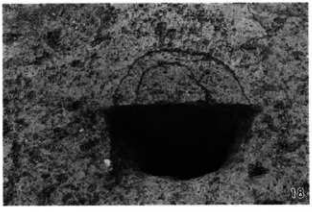
12:SD2
香炉片出土状況
13:SD2
完掘



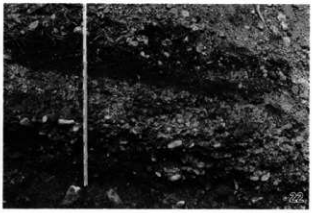
14:SD3
遺物出土状況
15:SD3
完掘

16:SD3
断面
17:SF1
検出状況

18:SK
断面
3区
19:3区遠景

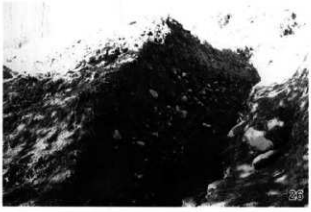


3区
20:17トレンチ
完掘
21:17トレンチ
断面



22:16トレンチ
断面
23:18トレンチ
完掘

4区
24: 4区遠景
25:段2・3
(3トレンチ)
断面



26:段6
(7トレンチ)
断面
27:段7

28:段8・10・11
(9トレンチ)
断面
29:段16
(15トレンチ)
断面

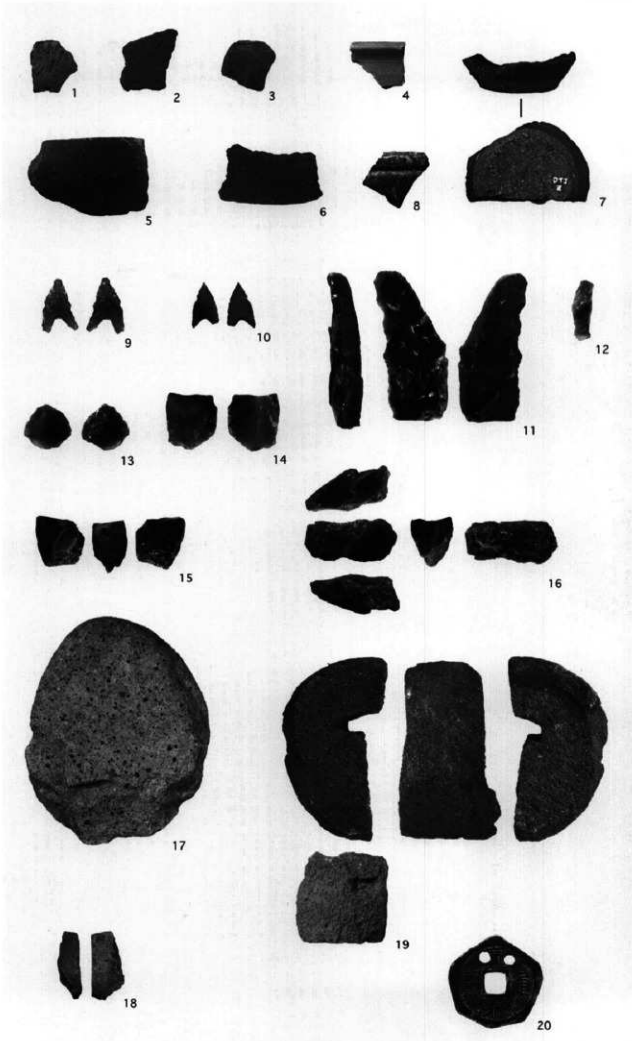
〈土器・陶磁器〉
2区
1～3縄文土器
4　　青磁
SD 2
5 在地製香炉
1区
7 在地製？陶器
4区
6 内耳土器
8 在地製？片口鉢

〈石　器〉
2区
縄文時代
9・10石鏃
11石槍未製品
12・15
くさび形石器
13・14　RF
16石核
17礫器

中世
18砥石
1区

近世？
19石臼

〈金属製品〉
20加工のある
寛永通宝



報告書抄録

ふりがな	けんどうゆざわもちづきせん てんじんばいぱすかんれんじぎょう まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ―さくしない―てんじんじょうせき
書名	県道湯沢望月線天神バイパス関連事業埋蔵文化財発掘調査報告書―佐久市内―
副書名	天神城跡
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	79
編著者名	寺内隆夫
編集機関	財団法人　長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007　長野県長野市篠ノ井布施高田963-4　TEL026-293-5926
発行年月日	2006年（平成17年）12月15日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
てんじんじょうせき 天神城跡	佐久市大字協和字本城・塚田・水白	20217	旧望月町遺跡番号132	36°15′14″70 （2区）	138°21′27″86 （2区）	平成15年1月6日～3月20日、平成15年10月15日～12月25日、平成17年6月22日～8月31日	9,000	県道バイパス建設工事に伴う緊急調査

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城郭関係地	中世	溝3	縄文土器・石器、弥生土器、須恵器、中・近世陶磁器ほか	城郭そのものの遺構は確認されなかったが、小字界にほぼ一致する中世の土地区画溝を検出

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　79
県道湯沢望月線天神バイパス関連事業埋蔵文化財発掘調査報告書
—佐久市内—

天神城跡

発　行　平成18（2006）年12月８日
発行者　長野県佐久建設事務所
（財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007　長野市篠ノ井布施高田963-4
TEL　026-293-5926
FAX　026-293-8157
Eメール　maibun@grn.janis.or.jp
印　刷　信毎書籍印刷株式会社
長野市西和田１丁目30番３号
TEL　026-243-2105